ISSN 1341－6952

東北大学埋蔵文化財調査年報 15

仙台城二の丸跡第 16 地点の調査
青葉山遺跡 E 地点第 6 次調査

東北大学埋蔵文化財調査研究センター
2001

東北大学埋蔵文化財調査年報 15

東北大学埋蔵文化財調査研究センター
2001

1．仙台城二の丸跡第16地点における瓦と礫による整地

2．青葉山遺跡E地点第6次調査で検出された隠し穴（1号土坑）

序

東北大学は、昭和58年から、文化財保護法にしたがって構内にある遺跡の調査に自らの責任で取りくんできた。埋蔵文化財調査委員会調査室、その後進機関である本センターが、学内の多くの方々の協力と支援をえて、その実務にあたってきた。関係者と調査研究員は、これまで、その調査方法の向上、調査体制の整備、改善に努力してきた。そして、調査の内容では膨大な成果をあげてきた。

15年間の調査の積み重ねによって、本学は、現在、収納箱2000箱をこす多数の文化財を保管している。これらの出土遺物は、整理、研究され、本年報を含め、これまでに16冊の調査報告書によって公開されてきた。その公開された資料には、学術的に貴重な資料が多数ふくまれている。二の丸出土の志野焼きの伝道師水差し、西屋敷跡の苑池から出土した墨書木札、多数の大堀相馬焼きの一括資料、青葉山の理学部構内出土の縄文時代早期の貝殻文土器群と石器群、あるいは旧石器群など多彩な資料を抱えている。これらの資料は、それぞれの分野の研究者に盛んに学術資料として利用されており、さらに、各地の博物館から、企画展示での借り出し、出版社での利用とその活用の頻度が確実に増大している。埋蔵文化財は、国民共有の財産であり、科学的に体系化された手続きをへて確保された学術資料である。これらの資料の恒久的な保管と社会的活用は、本学に課せられた責務といえる。

現在、施設部、埋蔵文化財調査研究センターは、この調査資料の管理、活用について、その方法、体制について真剣に検討を進めている。その体制を整えて、本学が管理する埋蔵文化財の有効な活用の道が切り開かれるとこを心から期待している。

本年報では、平成７年に実施した仙台城二の丸跡第16地点の調査と青葉山キャンパスの理学部建設予定地において発掘された縄文早期遺物散布地の調査成果をまとめた。二の丸跡第16地点の調査では、経済学部建物の南側に二の丸中枢施設群の遺構が高い密度で埋没していることが確認されている。また、青葉山では、平成４年からの一連の調査で、早期の縄文村の跡のほぼ全貌が捉えられることとなった。

本年報を刊行するにあたって施設部をはじめとする関係部局の担当の方々にご協力とご支援を頂いた。心からの敬意を表する次第である。

東北大学埋蔵文化財調査研究センター
センター長　須藤　隆

例　　言

1．本年報は、東北大学構内において、東北大学埋蔵文化財調査研究センターが1997年度に行った遺跡調査、ならびに研究成果をまとめたものである。

2．報告される遺跡と略号、調査期間、調査担当者は以下の通りである。

仙台城二の丸跡第16次調査地点（NM16）

1998年　2月9日～3月24日　関根達人

青葉山遺跡E地点第6次調査（AOE6）

1996年　7月1日～10月11日　関根達人・奈良（旧姓菊池）佳子

1997年　4月1日～7月30日　関根達人・奈良佳子

3．調査・整理作業は、東北大学埋蔵文化財調査研究センターが行った。

4．本年報の編集は、須藤隆の指導のもとに、藤沢敦・関根達人・京野恵子が担当した。

5．本文は、藤沢敦・関根達人・京野恵子・関敬司（東北大学文学部考古学研究室）が分担執筆した。本文執筆分担は、以下のとおりである。

第Ⅰ章：藤沢敦

第Ⅱ章：関根達人

第Ⅲ章1～3、4(1)(2)、6：京野恵子

第Ⅲ章4(3)：関敬司

また、第Ⅲ章5については、東北大学大学院理学研究科の大月義徳氏に分析を依頼し、原稿をいただいた。

英文要旨については、関根達人・京野恵子が作成し、阿子島香氏（東北大学大学院文学研究科）に校訂していただいた。

6．発掘調査および整理・報告書作成にあたっては、以下の方々や関係機関から御指導・御協力を賜った。記して感謝申し上げる（敬称略）。

仙台市教育委員会・東北大学大学院文学研究科考古学研究室

松本秀明・大月義徳（東北大学大学院理学研究科地学専攻環境地理学講座）

7．出土遺物・調査記録は、東北大学埋蔵文化財調査研究センターで保管・管理している。

凡　　例

1．方位は、真北に統一してある。
2．図１と図２は、それぞれ国土地理院作成の、２万５千分の１地形図「仙台西北部」と「仙台西南部」、１万分の１地形図「青葉山」を使用した。
3．川内地区の仙台城二の丸跡、および北方の武家屋敷地区にあたる地域の地形測量図は、仙台市教育委員会の作成による「仙台城跡地形図」（縮尺500分の１）を使用した。
4．遺物の実測図および写真の縮尺はそれぞれに示した。
5．引用・参考文献は、第Ⅲ章５を除いては、各章の末にまとめた。また本文中で、東北大学埋蔵文化財調査年報を引用する場合は、年報１という形で略記した。
6．挿図中のスクリーントーンは、特に指示しないものについては、以下の通りである。
　遺構断面図　礫：

発掘調査参加者

芦野徳松　芦野ヒデ子　天野美津枝　石田公子　上野美子　梅沢みえ　大内松夫　太田すゑ子　太田はるよ
大塚玲子　大森芳子　菅野春枝　後藤靖子　古山友子　佐伯晴子　佐々木きみ子　佐々木陽子　佐々木好夫
佐藤ケイコ　佐藤とし子　佐藤とみ子　庄司明美　菅原清一　菅原よしの　菅野元　鈴鹿久子　鈴木ヨシノ
髙橋和子　高原要輔　竹内美江子　千葉あけみ　土屋みどり　武田由里子　田中スエ　独古史恵　新沼よしえ
松浦智　三上剛　武藤信子　武藤初美　谷津ミツ子

整理作業参加者

青井恭子　岩井広成　今泉八重子　遠藤正彦　大塚玲子　小山久美子　古山友子　佐藤新子　庄司明美
白石浩子　関敦司　千葉直美　布川寛人　平井真理　森山隆

東北大学埋蔵文化財調査研究センター運営委員会（1997年度）

委員長	センター長　（文学部　教授）	須藤　隆
委　員	川内地区協議会　（文学部　教授）	安田二郎
	青葉山地区協議会（薬学部　教授）	大内和雄
	星陵地区協議会　（医学部　教授）	大井龍司
	片平地区協議会　（素材工学研究所　教授）	島田昌彦
	文学部　助教授	今泉隆雄
	東北アジア研究センター　教授	人間田宣夫
	文学部　助教授	阿子島香
	理学部　教授	蟹澤聰史
	工学部　教授	飯渕康一
	施設部　長	渡邊正雄
幹事	施設部　企画課長	渡邉三郎

東北大学埋蔵文化財調査研究センター運営委員会専門委員会（1997年度）

委員長	センター長（文学部　教授）	須藤　隆
	文学部　教授	羽下徳彦
	文学部　助教授	今泉隆雄
	文学部　助教授	阿子島香
	理学部　教授	蟹澤聰史
	工学部　教授	飯渕康一
	調査研究員（文学部　助手）	藤沢敦
	調査研究員（文学部　助手）	関根達人
	調査研究員（文学部　助手）	奈良佳子
	施設部　企画課長	渡邉三郎
	理学部　事務長	金田一夫

東北大学埋蔵文化財調査研究センター設置規程

（平成6年5月17日　規第56号）

（設置）

第一条　東北大学（以下「本学」という。）に、東北大学埋蔵文化財調査研究センター（以下「センター」という。）を置く。

（目的）

第二条　センターは、本学の施設整備が円滑に行われるために、構内の埋蔵文化財に関する調査及び研究を行い、

併せて資料の保管及びその活用を図ることを目的とする。

（職員）

第三条　センターに、センター長、調査研究員及びその他の職員を置く。

2　センター長は、本学の専任の教授をもって充て、総長が命ずる。

3　センター長は、センターの業務を掌理する。

4　センター長の任期は、二年とし、再任を妨げない。

5　調査研究員は、本学の専任の教官をもって充て、総長が命ずる。

6　調査研究員は、センターの業務に従事する。

（運営委員会）

第四条　センターに、センターの組織、人事、予算その他運営に関する重要事項を審議するため、東北大学埋蔵文化財調査研究センター運営委員会（以下「委員会」という。）を置く。

（組織）

第五条　委員会は、委員長及び次の各号に掲げる委員をもって組織する。

一　東北大学施設整備委員会各地区協議会の協議員　各一名

二　発掘調査に関連のある専門分野の教授又は助教授　若干名

三　発掘調査地に関連のある部局の教授又は助教授で、その都度委員長が指名するもの

四　施設部長

（委員長）

第六条　委員長は、センター長をもって充てる。

2　委員長は、必要があると認めるときは、委員会の同意を得て、委員以外の者を委員会に出席させ、議案について、必要な説明をさせ、又は意見を述べさせることができる。

（専門委員会）

第七条　委員会に、埋蔵文化財の発掘調査に関する専門の事項を調査審議させるため、専門委員会を置く。

2　専門委員会は、委員長及び次の各号に掲げる専門委員をもって組織する。

一　調査研究員

二　発掘調査に関連のある専門分野の教授又は助教授　若干名

三　施設部企画課長

四　発掘調査地に関連のある部局の事務部の長

3　委員長は、センター長をもって充てる。

（委嘱）

第八条　第五条第一号から第三号までに掲げる委員並びに前条第二項第二号及び第四号に掲げる専門委員は、総長が委嘱する。

（幹事）

第九条　委員会に幹事を置き、施設部企画課長をもって充てる。

（事務）

第十条　センターの事務は、当分の間、事務局施設部において処理する。

（雑則）

第十一条　この規程に定めるもののほか、センターの組織及び運営に関し必要な事項は、センター長が定める。

附　則（略）

東北大学埋蔵文化財調査研究センター運営委員会 (2001年3月現在)

委員長	センター長 (文学研究科 教授)	須藤 隆
委員	川内地区協議会協議員 (教育学研究科 教授)	菊池武克
	青葉山地区協議会協議員 (薬学研究科 教授)	小笠原國雄
	星陵地区協議会協議員 (医学研究科 教授)	宮村和夫
	片平地区協議会協議員 (電気通信研究所 教授)	沢田康次
	文学研究科 教授	今泉隆雄
	文学研究科 教授	大藤修
	文学研究科 教授	阿子島香
	東北アジア研究センター 教授	人間田宣夫
	理学研究科 教授	藤巻宏和
	工学研究科 教授	飯渕康一
	総合学術博物館 教授	柳田俊雄
	施設部長	黒岩七三
幹事	施設部企画課長	佐々木紀安

東北大学埋蔵文化財調査研究センター運営委員会専門委員会(2001年3月現在)

委員長	センター長(文学研究科 教授)	須藤 隆
委員	文学研究科 教授	今泉隆雄
	文学研究科 教授	大藤修
	文学研究科 教授	阿子島香
	東北アジア研究センター 教授	人間田宣夫
	理学研究科 教授	藤巻宏和
	工学研究科 教授	飯渕康一
	総合学術博物館 教授	柳田俊雄
	調査研究員(文学研究科 助手)	藤沢敦
	調査研究員(文学研究科 助手)	関根達人
	調査研究員(文学研究科 助手)	京野恵子
	施設部企画課長	佐々木紀安
	教育学研究科 事務長	佐々木健一

目　　次

巻頭カラー図版

例言
凡例
東北大学埋蔵文化財調査研究センター設置規定
東北大学埋蔵文化財調査研究センター運営委員会委員
東北大学埋蔵文化財調査研究センター運営委員会専門委員会委員
目次
図目次
表目次
図版目次

第Ⅰ章　1997年度調査の概要……1
1．はじめに……1
2．埋蔵文化財調査の概要……1
(1)　川内地区の調査……1
(2)　青葉山地区の調査……5
(3)　富沢地区の調査……6
3．その他のセンターの活動……6
第Ⅱ章　仙台城二の丸跡第16地点（ＮＭ16）の調査……13
1．仙台城二の丸跡の立地と歴史……13
2．調査経緯……13
(1)　1996年度までの調査……13
(2)　調査地点の位置……15
(3)　調査の方法と経過……15
3．検出遺構……15
4．出土遺物……18
5．まとめ……18
第Ⅲ章　青葉山遺跡Ｅ地点第６次調査（ＡＯＥ６）……19
1．調査経緯……19
(1)　青葉山地区の立地と
1996年度までの調査……19
(2)　調査地点の位置……19
(3)　調査の方法と経過……19
2．基本層序……21
3．検出遺構……21
4．出土遺物……32
(1)　遺物の出土状況……32
(2)　縄文土器……32
(3)　石器……33
5．青葉山遺跡Ｅ地点に認められる
埋没引張亀裂について……41
6．まとめ……44

英文要旨

写真図版

図　目　次

図1　東北大学と周辺の遺跡……2
図2　仙台城と二の丸の位置……3
図3　川内南地区厚生施設屋根取設に伴う
　立会調査地点の位置……4
図4　川内南地区厚生施設屋根取設に伴う
　立会調査地点石敷遺構確認状況……5
図5　仙台城二の丸跡・武家屋敷跡調査地点……7
図6　青葉山地区調査地点……9
図7　宮沢地区調査地点……11
図8　仙台城二の丸跡第16地点調査区の位置……14
図9　仙台城二の丸跡第16地点平面図・断面図……16
図10　仙台城二の丸跡第16地点出土瓦……17
図11　青葉山遺跡E地点第6次調査調査区の位置…20
図12　青葉山遺跡E地点第6次調査遺構配置図……22
図13　青葉山遺跡E地点第2次調査及び
　第6次調査検出地すべり痕……23
図14　青葉山遺跡E地点第6次調査
　グリット別出土土器密度図……24
図15　青葉山遺跡E地点第6次調査出土土器
　分布図（縄文早期後葉以外の土器）……24
図16　青葉山遺跡E地点第6次調査
　グリット別出土石器密度図……25
図17　青葉山遺跡E地点第6次調査
　出土石器接合関係図……25
図18　青葉山遺跡E地点第6次調査断面図(1)……26
図19　青葉山遺跡E地点第6次調査断面図(2)……27
図20　青葉山遺跡E地点第6次調査断面図(3)……28
図21　青葉山遺跡E地点第6次調査
　1、2、3号土坑……31
図22　青葉山遺跡E地点
　第6次調査出土土器(1)……35
図23　青葉山遺跡E地点
　第6次調査出土土器(2)……36
図24　青葉山遺跡E地点
　第6次調査出土石器(1)……37
図25　青葉山遺跡E地点
　第6次調査出土石器(2)……38
図26　青葉山遺跡E地点
　第6次調査出土石器(3)……39

表　目　次

表1　1995年度調査概要表……1
表2　仙台城二の丸跡第16地点出土瓦遺物集計表…17
表3　仙台城二の丸跡第16地点出土軒丸瓦観察表…17
表4　仙台城二の丸跡第16地点出土軒平瓦観察表…17
表5　青葉山遺跡E地点
　第6次調査出土土器観察表……40
表6　青葉山遺跡E地点
　第6次調査出土石器観察表……40
表7　青葉山遺跡E地点
　第6次調査母岩観察表……40

図 版 目 次

図版 1　仙台城二の丸跡第16地点の調査(1)……49
図版 2　仙台城二の丸跡
　第16地点の調査(2)・出土瓦……50
図版 3　青葉山遺跡E地点
　第 6 次調査区全景・検出遺構……51
図版 4　青葉山遺跡E地点
　第 6 次調査区検出遺構(1)……52
図版 5　青葉山遺跡E地点
　第 6 次調査区検出遺構(2)……53
図版 6　青葉山遺跡E地点第 6 次調査
　遺物出土状況・地すべり検出状況……54
図版 7　青葉山遺跡E地点
　第 6 次調査出土遺物(1)……55
図版 8　青葉山遺跡E地点
　第 6 次調査出土遺物(2)……56
図版 9　青葉山遺跡E地点
　第 6 次調査出土遺物(3)……57

第Ⅰ章　1997年度調査の概要

1．はじめに

東北大学には、仙台市内の各キャンパスに加えて、多くの研究施設がある。これらの各地区構内には、多くの埋蔵文化財が存在し、特に川内地区は近世の仙台城二の丸跡と武家屋敷跡にあたり、青葉山地区には旧石器時代から古代の遺跡が存在する（図1・2）。

東北大学構内の埋蔵文化財については、1983年度に東北大学埋蔵文化財調査委員会が組織されて以降、その実務機関である埋蔵文化財調査室が、その調査の任にあたってきた。1994年度からは、埋蔵文化財調査委員会を改組し、学内共同利用施設としての埋蔵文化財調査研究センターが設置され、調査委員会の事業を引き継いでいる。

1997年度においても、川内地区・青葉山地区・富沢地区で調査が行われ、新たな資料を提供することとなった。本年報は、これらの調査研究の成果についてまとめたものである。

2．埋蔵文化財調査の概要

1997年度は、川内地区・青葉山地区・富沢地区において、本調査2件、立会調査5件の、合計7件の調査を実施した（表1）。

(1)　川内地区の調査

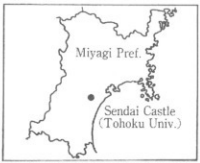
川内地区では、本調査1件、立会調査2件を実施した（図5）。

仙台城二の丸跡第16地点は、経済学部仮演習棟新営に伴う調査である。仮演習棟が建設される場所は、既に削平されていると考えられたことと、プレハブ建築であり、基礎の掘削が小規模であることから、立会調査で対処することとした。附属するガス管・給水管・排水管の埋設部分は、掘削の範囲が狭いため、これも立会調査で対処することとした。立会調査の結果、本調査が必要な区域が出てきたとしても、調査が必要な範囲が狭いことが予想されたため、その場合には随時対処するという方針で望んだ。演習棟本体を含めた、西よりの部分では、既に削平を受けており、江戸時代の遺構・遺物は残存していなかった。しかし、東よりの排水管埋設部分の一部において、江戸時代の整地層が残存しており、工事で一部削平されることとなったため、その区域に限って本調査を実施した。これについては、本年報の第Ⅱ章で報告する。

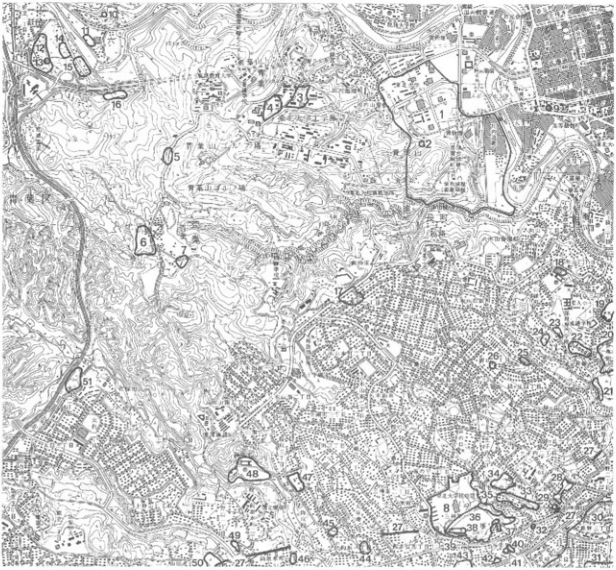
立会調査としたものの1件は、川内北地区のガス管・給水管改修に伴う調査である。工事区域は大きく2ヶ所に分かれる。1ヶ所は、川内北地区の中でも、西よりの区域一帯である。この区域では、いずれの場所においても、掘削深度まで近代以降の盛土内に収まるか、あるいは既に削平され江戸時代の層が残存していなかった。もう1ヶ所は体育館の西側で、1996年度に武家屋敷跡第6地点（ＢＫ６）として調査を行った場所である（年報14）。第6地点の調査によって、ここでは限地表下50cmで、江戸時代の遺構面が良好に残存していることが判明してい

表1　1997年度調査概要表
Tab.1　Excavations on the campus in the fiscal year 1997

調査の種類	調査地点（略号）	原因	調査期間	面積	時期
本調査	青葉山遺跡E地点第6次調査（ＡＯＥ６）	理学部研究実験棟（２期）新営	4/1～7/30	1,836㎡	縄文早・中・晩期
	仙台城二の丸跡第16地点（ＮＭ16・97－3）	経済学部仮演習棟新営	10/7・2/9～3/24	11㎡	近世
立会調査	富沢地区原子核理学研究施設（97－1）	電気ケーブル埋設	5/26	－	－
	青葉山地区薬用植物園（97－2）	温室建て替え	2/26	－	－
	川内北地区（97－4）	ガス管・給水管改修	2/20～3/4	－	－
	富沢地区職員宿舎（97－5）	受水槽・給水管取設	3/3	－	－
	川内南地区厚生施設（97－6）	厚生施設屋根取設	3/30～4/6	－	－



1 : Ruin of Sendai Castle
2 : Kawauchi steles
3 : Aobayama Site Loc. B
4 : Aobayama Site Loc. E
5 : Aobayama Site Loc. C
6 : Aobayama Site Loc. A
7 : Aobayama Site Loc. D
8 : Ashinokuchi Site



1：仙台城跡　2：川内古碑群　3：青葉山遺跡B地点　4：青葉山遺跡E地点　5：青葉山遺跡C地点
6：青葉山遺跡A地点　7：青葉山遺跡D地点　8：芦ノ口遺跡　9：片平仙台大神宮の板碑　10：郷六大日如来の碑
11：葛岡城跡　12：郷六城跡　13：郷六建武碑　14：沼田遺跡　15：郷六御殿跡　16：郷六遺跡　17：松ヶ岡遺跡
18：向山高裏遺跡　19：萩ヶ丘遺跡　20：茂ヶ崎城跡　21：二ツ沢横穴墓群　22：萩ヶ岡B遺跡　23：八木山緑町遺跡
24：二ツ沢遺跡　25：青山二丁目遺跡　26：青山二丁目B遺跡　27：杉土手（鹿除土手）　28：砂押屋敷遺跡
29：砂押古墳　30：富沢遺跡　31：泉崎浦遺跡　32：金洗沢古墳　33：土手内窯跡　34：土手内遺跡
35：土手内横穴墓群　36：三神峯遺跡　37：金山窯跡　38：三神峯古墳群　39：富沢窯跡　40：裏町東遺跡
41：裏町古墳　42：原東遺跡　43：原遺跡　44：八幡遺跡　45：後田遺跡　46：町遺跡　47：神瀧山遺跡
48：獅堂平遺跡　49：上野山遺跡　50：北前遺跡　51：佐保山東遺跡

図1　東北大学と周辺の遺跡
Fig. 1　Archaeological sites and Tohoku University

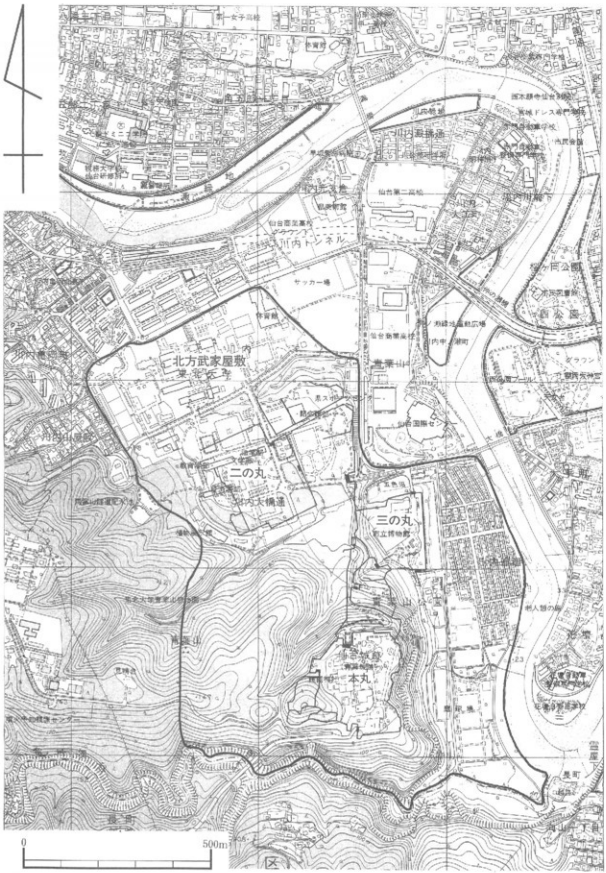


図2　仙台城と二の丸の位置
Fig. 2　Distribution of Sendai Castle

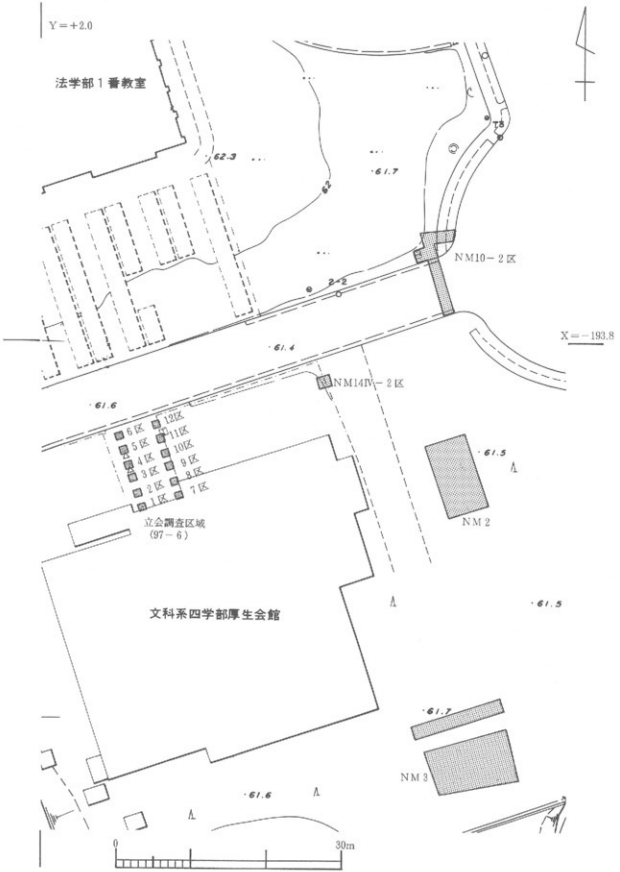


図３　川内南地区厚生施設屋根取設に伴う立会調査地点の位置
Fig. 3　Locations of trial trenches at the south part of Kawauchi campus

た。今回の調査においても、江戸時代の遺構面が良好に遺存していることが確認できたため、既存給水管にルートが重なる部分では、給水管掘方に埋設し、既存管から離れる部分では、遺構面を破壊しない深さに埋設するようにして対処した。

川内南地区厚生施設の屋根取設に伴う調査は、食堂などがある厚生施設の入り口に、屋根を設置する工事に伴う調査である。屋根を支える柱を立てる位置に、柱基礎となるコンクリート杭を設置するため、約1m四方掘削するというものであった(図3)。この場所は、二の丸の中でも中心的な建物が連なる区域にあたる。また、1974年の厚生会館建築の際に、仙台市教育委員会が実施した小規模な調査においても、石組溝が検出されている(未報告)。今回の工事に伴う掘削は小規模であったが、重要な遺構が検出される可能性が高いものと考え、慎重に対応することとした。その結果、柱12本のうちの2ヶ所では(4区・5区)、アスファルトの下に30cm程の厚さの砕石があり、5cm程の近代の土層をはさんで、その下から平坦な割石が並べられた状態で発見された(図4)。石敷の直上には、焼土と灰のブロックが部分的に認められた。この焼土と灰は、明治15年(1882年)の火災に伴うものと考えられ、そうであれば石敷は江戸期に遡る可能性がある。そのため、石敷を破壊しないように、基礎の掘削深さが現地表から60cmの予定であったのを、現地表から40cmになるよう、基礎の工法を変更することで対処することとし、これ以上の調査は行っていない。

4区石敷確認状況(南から)

5区石敷確認状況(南から)

図4　川内南地区厚生施設屋根取設に伴う立会調査地点石敷遺構確認状況
Fig. 4　Views of trial trenches at the south part of Kawauchi campus

(2)　青葉山地区の調査

青葉山地区では、本調査1件、立会調査1件を実施した(図6)。

本調査を実施したのは、理学部研究実験棟(2期)新営に伴う、青葉山遺跡E地点第6次調査である。この理学部研究実験棟は、3期に分けて工事を行う計画で、今回は、その2期工事区域の調査である。調査地点は、1994年度に実施した青葉山遺跡E地点第3次調査区(年報12)の西側に、1995年度に実施した第4次調査区(年報13)の南側に隣接する場所である。第3・4次調査では、縄文時代早期後葉の貝殻条痕文土器や石器が大量に出土した他、同時期の竪穴住居などが検出されている。今回の調査でも、縄文時代早期の遺物が出土したほか、縄文時代中期・晩期の遺物も出土した。この調査は、本来は1996年度事業として、1996年7月から調査を開始した。しかし、富沢地区の理学部附属原子核理学研究施設の実験棟新営に伴う、芦ノ口遺跡第4次調査(年報14)を急遽実施する必要が出てきたため、調査途中で中断し、本年度に事業を繰り越していたものである。これについては、本年報の第Ⅲ章で報告する。

立会調査を行ったのは、薬学部薬用植物園の温室建て替えに伴う調査である。既存の温室を取り壊し、同じ場所に建て替えるもので、既存温室基礎で一部は削平されていると考えられた。また新築される温室の基礎の掘削範囲も狭く、かつ浅いため立会調査とした。既存温室建築時に、盛土によって平坦に造成されており、本来の地

形は北西側が高く、南東側へ緩やかに傾斜していたことが判明した。この北西側では、一部火山灰層を削平することとなったが、遺構・遺物は発見されなかった。

(3) 富沢地区の調査

富沢地区では、立会調査2件を実施した（図7）。

富沢地区には、理学部附属原子核理学研究施設と職員宿舎が置かれている。原子核理学研究施設での調査が1件、職員宿舎での調査が1件である。

原子核理学研究施設電気ケーブル埋設は、1996年度に調査を実施した実験棟（TM4・年報14）で使用する電源用のケーブルを、変電所から埋設するための工事である。可能な限り既設管の掘方内にケーブルを埋設するようにした。それ以外の新たに掘削される部分も、約30cmの表土の下は、近代の盛土か地山が露出し、遺構・遺物は発見されなかった。

職員宿舎の受水槽・給水管取設に伴う調査は、職員宿舎の給水施設が老朽化したため、給水設備を新たに設置することに伴う調査である。職員宿舎の区域は、これまでにも何度か立会調査を行ってきたが、ほとんどの場所で既に削平されていると考えられるため、立会調査とした。宿舎入口付近では、現地表下約30cmのところで、厚さ10cm程度の旧地表が残存していることを確認できたが、遺構・遺物は発見されなかった。これ以外の部分では、旧表土は確認できず、現表土のすぐ下で地山が露出する。このことから、調査地点は本来北側に向かって低くなる地形で、入り口周辺では盛土の下に旧表土が残っているが、それより南側は削平を受けていることが明らかとなった。

3．その他のセンターの活動

1996年度末に刊行した調査年報8において、仙台城二の丸跡第9地点の報告を行い、翌1997年度末刊行の調査年報9において、二の丸跡第10地点の報告を行うこととなった。この時点で、遺物がまとまって出土している仙台城二の丸跡の調査は、全て報告したこととなり、調査と報告が一旦の区切りとなった。そこで、調査年報9において、それまでの仙台城二の丸跡の調査成果をまとめて、多方面からの検討を加えることとした。それに先だって、この二の丸跡の考古学的調査成果のまとめを、日本考古学協会において研究発表することとした。日時・題目・発表者などは下記の通りである。

1997年5月25日　日本考古学協会第63回総会　於：立正大学
発表題目：「仙台城二の丸跡の考古学的調査成果」　発表者：関根達人

センター業務に関わる資料調査等としては、以下のとおりで、それぞれ担当する調査研究員が出張した。

1997年6月21・22日　日本文化財科学会第14回大会　於：天理大学
藤沢敦

1997年6月23日　奈良県立橿原考古学研究所・元興寺文化財研究所
藤沢敦

1998年3月11・12日　会津若松市教育委員会・会津本郷焼資料館
関根達人・奈良佳子

当センター保管の資料の貸出としては、次の2件であった。

貸出先：仙台市博物館　平成9年度企画展「発掘された仙台城－本丸・二の丸・三の丸－」
貸出資料：二の丸跡第5地点・第9地点出土遺物200点・同写真4点
貸出期間：1997年12月19日～1998年4月25日

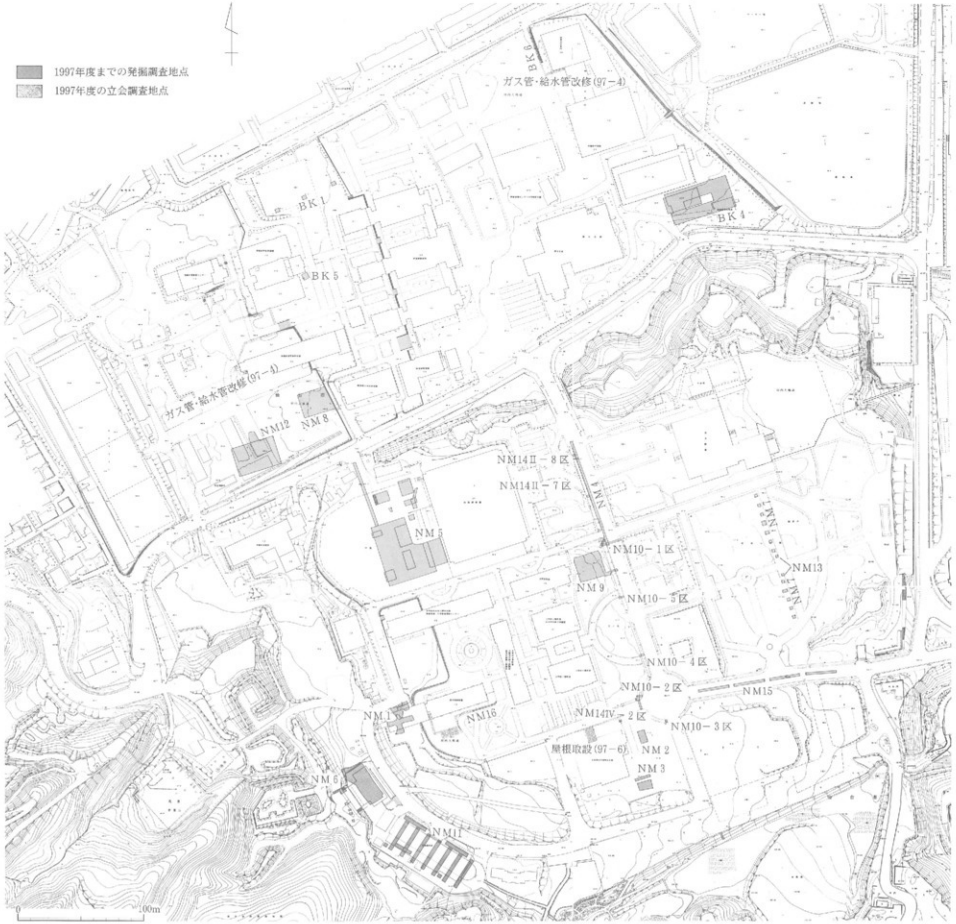


図5　仙台城二の丸跡・武家屋敷跡調査地点
Fig. 5　Locations of excavations untill 1997 at *Ninomaru* (NM i.e. secondary Citadel) and *samurai* residence (BK)

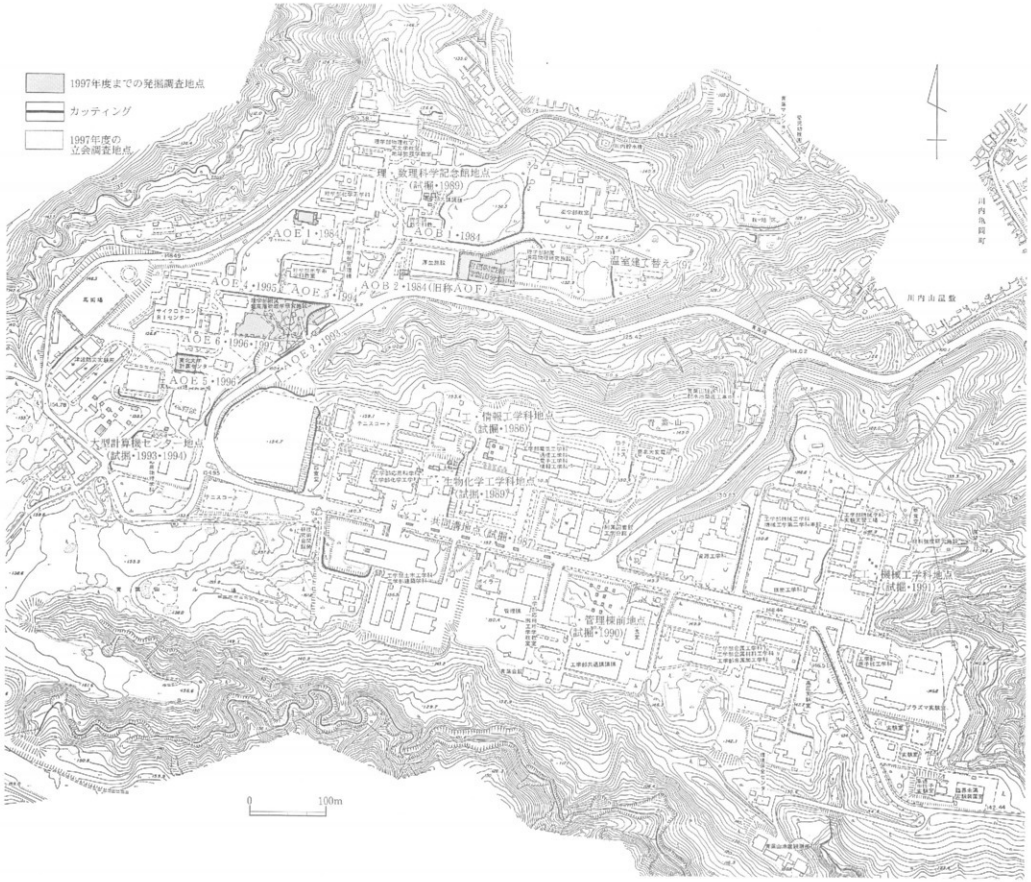


図6　青葉山地区調査地点
Fig. 6　Locations of excavations at Aobayama campus

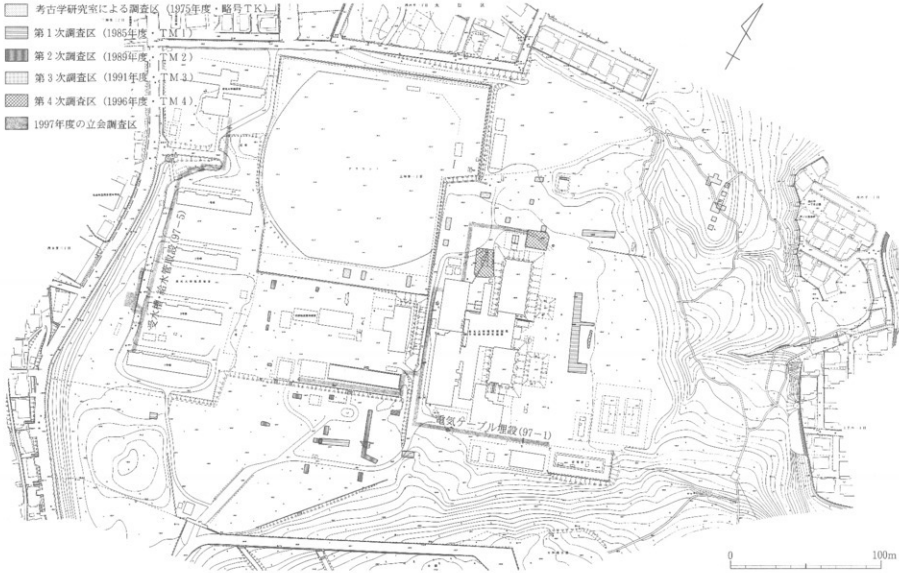


図７　富沢地区調査地点
Fig. 7　Locations of excavations at Tomizawa campus

貸 出 先：東北放送テレビ　特別番組『仙台城見櫓復元』

貸出資料：仙台城二の丸跡第５地点調査状況写真

当センターの業務に関わって、あるいは調査研究員の専門領域に関わる事項で、外部から派遣等の依頼があったものは、次のとおりであった。

担当者：藤沢敦

1997年８月７日　福島県教育委員会　福島県埋蔵文化財技術者講習会講師　於：矢吹町文化センター

1997年10月25日　岩手県胆沢町教育委員会　角塚古墳発掘検討委員会　於：胆沢町文化創造センター

当センターの調査研究員による科学研究費等の採択は、次のとおりであった。

藤沢敦　科学研究費補助金　基盤研究(B)(１)「東北・九州地域における古墳文化の受容と変容に関する比較研究」（分担・代表者鹿児島大学上村俊雄）

岡崎達人　科学研究費補助金　奨励研究(A)「東北地方近世窯業生産に関する基礎的研究」（代表）

〈引用・参考文献〉

東北大学埋蔵文化財調査研究センター　1997『東北大学埋蔵文化財調査年報８』

東北大学埋蔵文化財調査研究センター　1998『東北大学埋蔵文化財調査年報９』

東北大学埋蔵文化財調査研究センター　1999『東北大学埋蔵文化財調査年報12』

東北大学埋蔵文化財調査研究センター　2000『東北大学埋蔵文化財調査年報13』

東北大学埋蔵文化財調査研究センター　2001『東北大学埋蔵文化財調査年報14』

第Ⅱ章　仙台城二の丸跡第16地点（ＮＭ16）の調査

１．仙台城二の丸跡の立地と歴史

東北大学の川内地区は、「残飯沢」と通称される沢とその脇を東西に走る道路（市道川内－青葉山線）によって、川内南地区と北地区に分かれている。川内南地区は仙台城二の丸が置かれた場所であり、北地区は武家屋敷が存在した区域に相当する。

仙台城は、仙台市街地の西方、広瀬川を渡った通称青葉山の東端に位置している（図１）北と東を広瀬川に、南を竜の口渓谷によって囲まれている。本丸は標高115～140mの急崖上に立地しており、北側の二の丸、北東側の三の丸も、それぞれ標高61～78m、40mの河岸段丘上に位置する（図２）。

仙台城は、慶長５年（1600年）、仙台藩初代藩主伊達政宗によって、本丸の造営が開始される。川内地区の後に二の丸が造営される区域には、伊達政宗の四男である伊達宗泰の屋敷が置かれていた。元和６年（1620年）には、この伊達宗泰の屋敷の北側に、政宗の長女五郎八姫の居館「西屋敷」が造られる。

寛永15年（1638年）、二代藩主伊達忠宗は、もとの伊達宗泰の屋敷地において、二の丸の造営を始める。二の丸完成後、仙台藩の政治・諸儀式のほとんどはここに移され、藩主の居館ともなる。17世紀末から18世紀初頭の元禄年間には、四代藩主伊達綱村によって二の丸は大改造され、もとの「西屋敷」の敷地を取り込んで拡張される。その後いく度かの災害や火災を被るが、その都度再建され、幕末まで仙台城の中枢として機能していく。

版籍奉還の行われた明治２年（1869年）には二の丸に勤政庁が置かれ、明治４年（1871年）の廃藩置県後は、仙台城が明治政府・兵部省の管轄下に移り、東北鎮台（後に仙台鎮台）が置かれる。この頃に本丸の建物群は取り壊されるが、二の丸建物群は残っている。しかし明治15年（1882年）の火災で、二の丸建物群のほとんどが焼失する。明治21年（1888年）には仙台鎮台廃止、仙台第二師団が設置され、敗戦まで続くこととなる。もとの二の丸にあたる区域には第二師団司令部が、北側の武家屋敷にあたる区域には歩兵隊や輜重隊などが置かれていた。戦後は米軍の駐留地となり、昭和32年（1957年）に米軍より返還されて後、東北大学が移転し現在に至るのである。

２．調査経緯

(1)　1996年までの調査

東北大学が川内地区に移転してからしばらくの間は、米軍の建物が使われていたが、昭和35年（1960年）の記念講堂建設以降、随時施設整備が進行することとなる。特に、昭和40年代後半に、多くの施設が建設された。この移転に伴う一連の施設整備に伴っては、埋蔵文化財の調査はほとんど行われず、1974年の文系４学部厚生会館建築に伴って、仙台市教育委員会によって一部が調査されただけであった。また、1978年には、川内北地区のプール脇の排水管埋設の際に、石組の井戸が発見され、東北大学文学部考古学研究室によって臨時の調査がなされたが、その経過上、小規模な調査に留まらざるを得なかった。

1983年に東北大学埋蔵文化財調査委員会が設置され、学内の埋蔵文化財調査に組織的・継続的に対応する体制が整って以降は、委員会と、その下に実務機関として設置された埋蔵文化財調査室が調査にあたることとなった。1994年度からは、埋蔵文化財調査研究センターが設置され、調査委員会の事業を引き継いでいる。埋蔵文化財調査研究センターとその前身の調査委員会が行った、仙台城二の丸跡および二の丸北方武家屋敷跡の調査は、1996年度までに18地点を数えるに至っている。これらの調査成果については、『東北大学埋蔵文化財調査年報』１～14において報告してきたところである。

この間の調査によって、二の丸地区では、検出遺構と絵図との対比が、かなり高い精度で行えるようになって

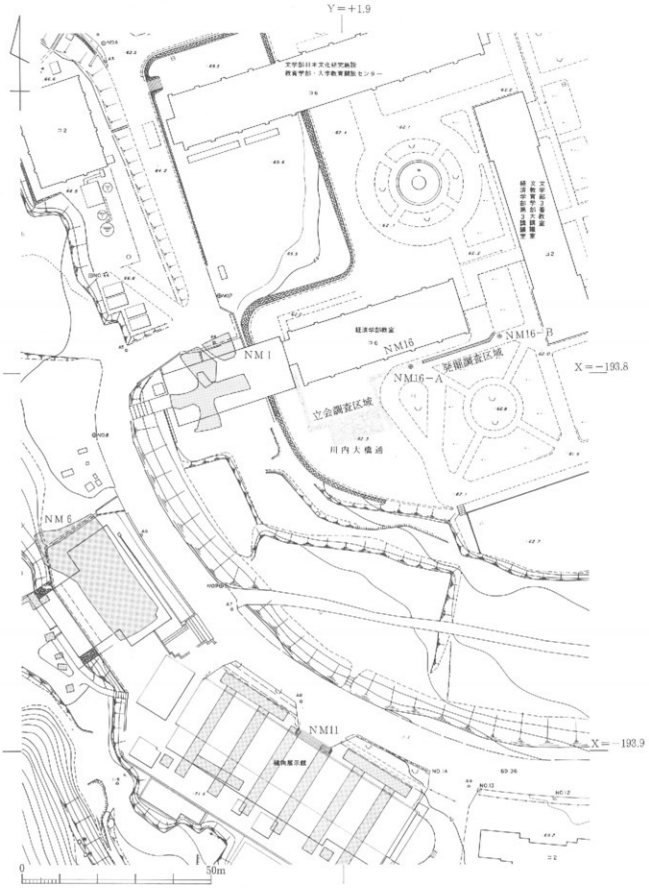


図 8　仙台城二の丸跡第16地点調査区の位置
Fig. 8　Location of NM16
NM16 i.e. Location 16 of *Ninomaru* (the secondary citadel of Sendai Castle)

きている。また、膨大な各種の遺物が出土しており、陶磁器類などについては、その変遷の大要が明らかとなっている。これらについては、年報9においてまとめて検討されているので、参照されたい。

(2) 調査地点の位置

今回、川内南地区において、経済学部仮演習棟新設にともない調査を行った地点は、仙台城二の丸中奥の南西隅周辺に相当し、調査地点のすぐ西側には青葉山の山裾が迫っている（図8）。演習棟の建物の本体は仮設のため、基礎工事の掘削深度は浅いが、本体から東にのびる排水管の部分については、勾配の関係上、工事の際にある程度の深さまで掘削せざるを得ないことから、排水管区で江戸時代の遺構面が発見されることが予想された。

以前に行った絵図との対比に拠れば、調査地点のうち排水管区は、御座之間と御寝所にはさまれた場所に相当すると考えられた（年報9）。御座之間は、藩主の表の居間であると同時に年中恒例の祝儀の場でもあり、御寝所や小広間、書院、客之間、遠侍とともに、創立期以来、二の丸殿舎構成の骨格をなす施設である。

(3) 調査の方法と経過

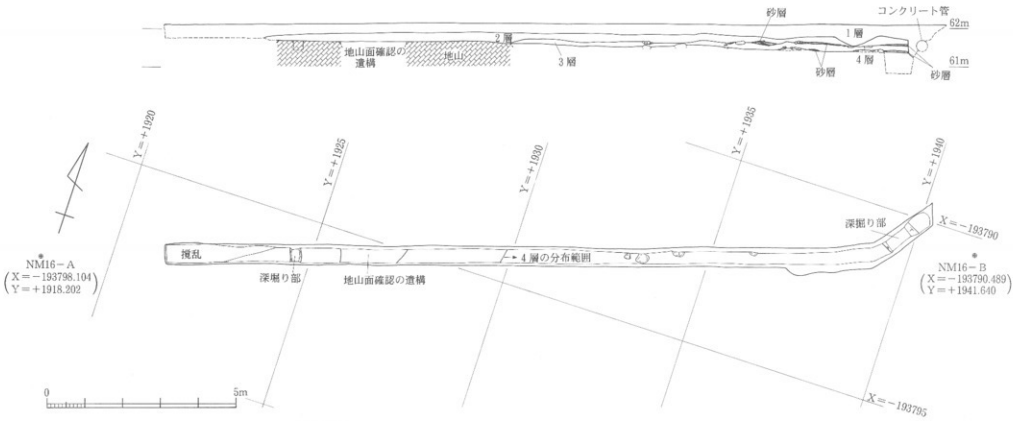
建物本体区に関しては、1997年10月7日に、0.5m×0.5m×深さ0.5mの坪掘りを2箇所で行った。その結果、現地表下0.5mまでは近代以降の盛土であり、仮設建物の建設により江戸時代の遺構面が破壊される危険性はないことが確認できた。したがって建物本体区では本調査を行わず、念のため、掘削工事の施工時に、立ち会うこととした。

排水管区に関しては、工事による掘削が江戸時代の遺構面まで及ぶ可能性が十分予想された。しかし、現地はその当時道路として利用されており、この部分の発掘調査を行うにはアスファルトやその下の砕石を除去する必要があることから、工事の日程にあわせて調査計画を立てた。

排水管区では、1988年3月3日に、経済学部研究棟の正面玄関前付近と、同研究棟南東隅付近の2箇所の試掘を行った。その結果、後者では現地表下約40cmで、瓦を含む青灰色の整地層に達することが判明した。研究棟の正面玄関より東側に関しては、後日改めて本調査を実施することとし、2箇所の試掘坑は一旦埋め戻した。本調査は、1998年3月16日から24日までの間行い、実働7日間を要した。

3．検出遺構

排水管区は、経済学部研究棟の正面玄関付近を境に、それより西側の建物本体区に近い部分と、東半部とで大きく様相が異なる。西半部では、建物本体区同様、表土（1層）、近代の整地層（2層）の直下に地山の砂礫層が現れた。一方、東半部では、地表下約50cmに、地山に由来する比較的均質な砂質シルト層（3層）があり、その上下で多量の瓦と礫、砂を敷いた面が検出された（図9、図版1・2）。これらは整地のための一連の地業と考えられる。今回の調査区は狭いため、3層上面で柱穴や明確に礎石と断定できるものは発見されなかったが、本来は、3層上面に建物が存在していた可能性が高い。下の瓦・礫敷面以下には地山に由来すると考えられる盛土（4層）が厚く堆積している。調査は4層の途中で止めており4層自体の厚さは不明であるが、少なくとも50cmは超える。瓦や木羽を含む4層は、水分も多く、しまりも悪い。4層と3層を一連のものとして捉え、下部盛土である4層だけでは十分な強度が得られなかったため、その上に地業に適した3層をはさむ形で瓦と礫による整地を行ったと理解することができる。なお、3・4層の分布していない排水管区西側の地山面で、遺構のプランと思われるものを1基確認した。これについては、工事により破壊される危険性がなく掘り下げを行っていないため、性格や年代は不明である。



基本層注記
1層　舗装アスファルトと基盤の砕石
2層　10G4/1　暗緑灰色　砂質シルト　粘性無・しまり強　円礫多量含む
瓦・タイル・ビニールなどが混じる大学時の整地層
3層　5BG5/1　青灰色　砂質シルト　粘性弱・しまり強　地山由来の比較的均質な整地層
上面に砂・礫・瓦が面的に広がる
4層　5BG5/1　青灰色　砂質シルト　粘性弱・しまり中　小礫・瓦・炭化物・木羽少量含む
厚さ60cm以上の大規模な整地層　上面に砂・礫・瓦が面的に広がる

図9　仙台城二の丸跡第16地点平面図・断面図
Fig. 9　Plan and cross section at NM16

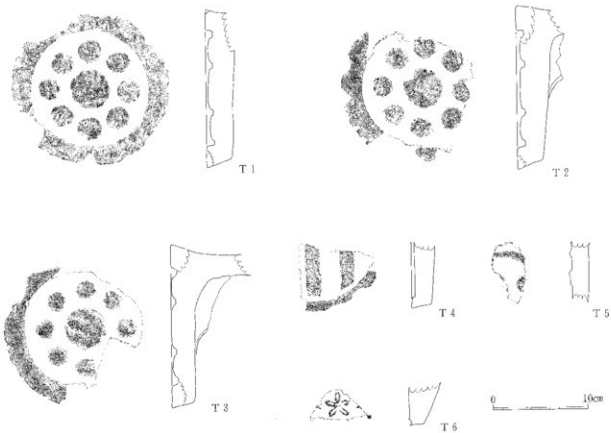


図10　仙台城二の丸跡第16地点出土瓦
Fig. 10　Roof tiles from NM16

表2　仙台城二の丸跡第16地点出土瓦集計表
Tab. 2　Corrected distribution of roof tiles at NM16

区・層・遺構	平瓦1類	平瓦2類	丸瓦類	桟瓦類	板葺瓦	軒平瓦	軒丸瓦類	面戸瓦	輪違い	その他の瓦	不明瓦
2層～3層上面	44(5.05)	68(4.05)	16(1.34)	1(0.03)	2(0.2)		1(0.08)	1(0.19)			23(0.12)
3層上面	244(33.57)	135(17.91)	100(14.92)	1(0.1)	1(0.48)		1(0.35)		2(0.13)	8(4.24)	142(1.88)
4層上面	164(24.95)	68(10.25)	59(9.65)		1(0.28)	1(0.08)	5(3.5)	2(0.33)			39(1.03)
合　計	452(63.57)	271(32.21)	175(25.91)	2(0.13)	4(1.0)	1(0.08)	7(3.93)	3(0.52)	2(0.13)	8(4.24)	204(2.27)

表3　仙台城二の丸跡第16地点出土軒丸瓦類観察表
Tab. 3　Notes on round eaves tiles at NM16

登録番号	出土場所	瓦当文様	瓦当直径(cm)	瓦当内径(cm)	周縁幅(cm)	備考	図	図版
T 1	4層上面	九曜文	17.0	12.5	2.4		10	2
T 2	4層上面	九曜文	17.0	12.5	2.4		10	2
T 3	4層上面	九曜文	17.0	12.5	2.4		10	2
T 4	4層上面	三巴唐文	－	－	1.3		10	2
T 5	2層～3層上面	巴　文	－	－	－		10	2

表4　仙台城二の丸跡第16地点出土軒平瓦類観察表
Tab. 4　Notes on flat eaves tiles at NM16

登録番号	出土場所	瓦当文様	瓦当形状	瓦当長(cm)	幅幅(cm)	備考	図	図版
T 6	4層上面	細格子2＋	不明	－	－		10	2

4．出土遺物

3層をはさんでその上下から多量の瓦が出土しており、それぞれ、3層上面、4層上面で遺物の取り上げを行った。前述したように、これらの瓦は礫と混じり合った状態で出土しており、礫と同じように整地に利用された可能性が高い。軒平瓦、軒丸瓦、平瓦、丸瓦、桟瓦、板塀瓦、面戸瓦、輪違いなどの種類が認められる（表2）。なお、瓦の分類基準や名称に関しては、これまでの仙台城二の丸跡出土瓦の分析を踏襲しており、詳細は年報9を参照されたい。出土した瓦のなかには軒桟瓦はなく、桟瓦と言えるものもごく少量である。

軒平瓦は、瓦当部の中心飾りに「細桔梗2類」を用いるものが、4層上面で1点出土している（図10－Ｔ6、図版3）。仙台城におけるこれまでの出土事例から、「細桔梗2類」には「唐草3類」が組み合うことが知られている（年報9）。仙台城三の丸跡（仙台市教育委員会1985）では、このタイプの軒平瓦が三の丸造営以前の段階から存在することが確認されており、17世紀前葉には出現していたことが確実である。

軒丸瓦は、4層上面から九曜文3点（図10－Ｔ1～3、図版2）、三引両文1点（図10－Ｔ4、図版2）、瓦当文様不明1点の計5点、3層上面から瓦当文様不明1点、2層～3層上面から巴文1点（図10－Ｔ5、図版2）の合計7点が出土している。このうち4層上面から出土した3点の九曜文軒丸瓦は、瓦当の直径、内径、周縁幅とも大きさが全て一致しており、同笵ではないものの同じ規格で製作されたものと言える（表3）。仙台城の軒丸瓦にいつ頃から九曜文が使われだしたかについては明らかになっていない。しかしこれまでの調査成果から、二の丸の造営が契機となり、九曜文を含む藩主伊達家の家紋が仙台城の瓦に使われるようになったとの推定を行っている（年報9）。

陶磁器は、4層上面で磁器が2点、3層上面より上の層で磁器が3点出土しているが、いずれも細片のため図示したものはない。4層上面出土の磁器は18世紀中葉以降のものである。

5．まとめ

今回の調査の結果、西の山際近く、既に地山面まで削平を受けてしまっている部分と、東側の江戸時代の遺構面が残っている部分との境を推定する材料が得られた。東側の江戸時代の遺構面が残っている部分では、現地表から約50cm下に、多量の瓦と礫を敷いた整地面が存在する。この整地は、出土した瓦や磁器からみて、18世紀後半から幕末に行われた可能性が高い。また、整地に使われた瓦には桟瓦類はほとんど含まれておらず、出土した九曜文軒丸瓦には規格性が認められることから、本瓦葺き建物の解体にともない不要となった瓦を一括して再利用したとの推定が可能である。今回の調査地点は、絵図との対比から二の丸殿舎の中枢とも言うべき御寝所・御座之間付近に当たっており、そのような場所では、不要となった瓦を用いた丁寧な整地が行われていることが判明した。今回実際に調査した瓦敷きは、面積にして僅か5㎡足らずであるが、130kgをこす瓦が出土した。今後、今回の調査地点周辺で掘削工事が行われる際には、慎重な対応が必要である。

〈引用・参考文献〉

仙台市教育委員会　1985『仙台城三の丸跡』仙台市文化財調査報告書第76集
東北大学埋蔵文化財調査研究センター　1998『東北大学埋蔵文化財調査年報』9

第Ⅲ章　青葉山遺跡E地点第6次調査(AOE6)

1．調査経緯

(1)　青葉山地区の立地と1996年度までの調査

東北大学の理学部・工学部・薬学部が所在する青葉山地区は、標高145～155mの、青葉山段丘のⅢ面に位置する。青葉山段丘は、高位よりⅠ～Ⅳ面に分けられており、各面を覆う火山灰層の関係から、Ⅰ・Ⅱ面とⅢ・Ⅳ面は形成時期の異なる段丘とされる（大月義徳1987）。すなわち、より低位のⅢ・Ⅳ面には、愛島軽石層より上位の指標テフラのみが見られる。

青葉山地区では、旧石器時代をはじめとする遺物が発掘・採集された青葉山遺跡A～E地点が知られている。東北大学構内には、B地点とE地点が存在する。B地点は本調査区の北東に位置し、1984年に2箇所の発掘調査が行なわれ、旧石器時代の文化層が発見された（年報2）。E地点ではこれまで5次にわたる調査が行なわれている。1984年の理学部化学機器分析センター新営に伴う第1次調査では、旧石器時代の陥し穴状遺構が検出された（年報2）。1993年の青葉山地区基幹整備に伴う第2次調査で縄文時代早期～平安時代の遺物が発見され（年報11）、これによりE地点の範囲が大きく広がっていることが明らかとなった。翌1994年に行なわれた理学部自然史標本館の新営に伴う第3次調査では、縄文時代早期後葉の住居跡2棟と、4000点近い貝殻条痕文土器・石器が出土し、土器の詳細な検討により、これまで東北地方では空白であった当該期の土器型式について「青葉山E式」を提唱した（年報12）。1995年の理学部研究実験棟新営（1期）に伴う第4次調査では、陥し穴状の土坑が検出され、青葉山E式土器の分布のほか、縄文時代晩期の土器の集中地点も確認されている。1996年の青葉山基幹整備受水槽・ポンプ室新営に伴う第5次調査では、縄文時代早期の遺物のほか、下層から中期・後期旧石器時代の石器が層位的に確認された（年報14）。

(2)　調査地点の位置

調査地点は理学部地学系学科教室の南に東西に走る道路と宮城教育大学方面への道路に挟まれた部分の東端近くに位置する。調査区南東側には地すべり痕が検出された第2次調査区があり、東側には現在自然史標本館が建てられている第3次調査区が位置する。また、北東側は理学部研究実験棟新営（1期）に伴う第4次調査区に隣接している。本遺跡は、広瀬川の開析した河岸段丘のうち、最も古い青葉山段丘のなかで低い方から2番目の面（Ⅲ面）に位置する。遺跡の南東には、川内山屋敷へ向かって開く沢に谷頭が存在し、遺跡はその沢に面する緩斜面に立地している。

(3)　調査の方法と経過

調査地点は青葉山遺跡E地点の範囲内で、以前に調査した東側の第3次調査では、先述のように縄文時代早期の遺物・遺構が検出されている。北隣する第4次調査では、縄文時代早期のほか、縄文時代晩期の遺物も出土している。また、本調査地点の南西に位置する第5次調査では縄文時代の遺物包含層の下の火山灰層から、後期旧石器と中期旧石器が層位的に検出されている。そのため縄文時代の遺物包含層に関しては全面調査し、下層の火山灰層に関しては、旧石器時代の遺構・遺物の有無を確認するため、部分的に試掘調査を行なった。

重機によって1層を取り除いた後、2層以下を手掘り調査した。工事とのかねあいや排土置き場の都合等から表土の除去は数回に分けて行なっている。グリッドは第4次調査から連続する形で設定した。2層上面・2層および遺構内の遺物を取り上げる際にはすべて出土位置と標高を記録した。2層を掘り下げながら遺構の確認を行ったが、遺構はすべて3層上面で確認している。3層上面を検出した段階で地表面の標高を記録した。図12に示した標

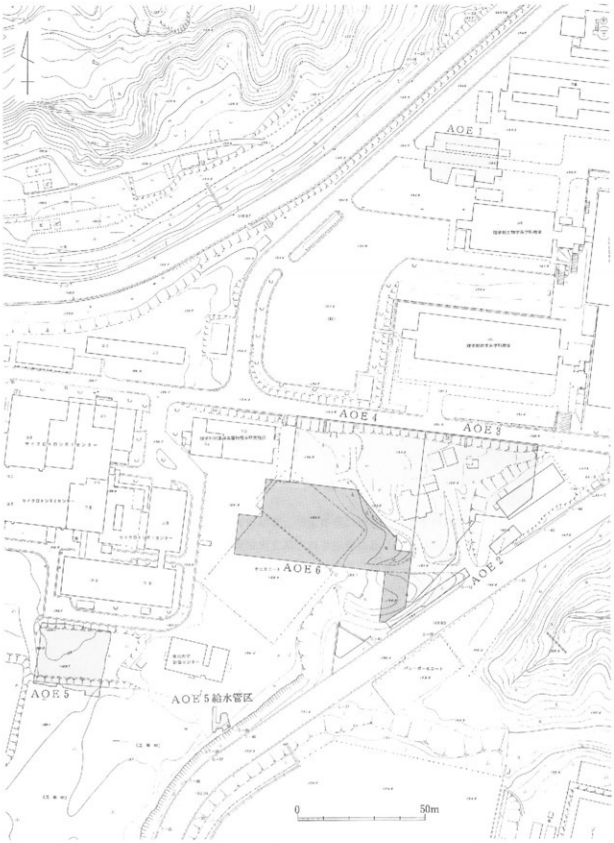


図11　青葉山遺跡E地点第6次調査調査区の位置
Fig. 11　Location of AOE6 (AOE6 i.e.the fourth excavation of Aobayama site Loc.E)

高は、3層上面のものである。層序と旧石器時代の遺構・遺物の存在を確認するために、図18に示すように3層以下については、調査面積の約1割を目安に深掘試掘調査を行なった。3層上面や深掘試掘区の断面などで、地すべりによる地層のずれが検出された[注]。遺構平面図・断面図、遺物の出土位置等は基本的に20分の1で実測を行なった。

調査は1996年7月1日から開始した。ＢＢ～ＢＰ－10～13区、およびＡＲ～ＢＦ－14～19区の調査を終了した時点で、9月30日に急遽、宮沢地区の原子核理学研究施設実験棟新営に伴う、芦ノ口遺跡第4次調査（年報14）を行なうことが決まり、本調査は10月11日で一旦中断した。翌1997年の調査は4月10日より再開し、7月30日ですべての調査が終了した。いずれの深掘調査においても、旧石器時代の遺構・遺物は確認されていない。

注）地すべり痕については、東北大学大学院理学研究科助教授松本秀明氏、同助手大月義徳氏に来跡いただき、ご教授いただいた。詳細については、本章5で触れる。

2．基本層序

基本層序は1層～12層に分けられた（図18～20）。1層は大学による盛土や埋設管理土とそれ以下の旧表土を一括している。旧表土面からは戦前の第二師団工兵隊が野戦演習に使ったと考えられる塹壕や、開拓農家で飼われていたと考えられるヤギの墓坑などが見つかっている。

1層～12層までの層序は、基本的に青葉山遺跡第5次調査の層序と同じであるが、細別には多少の差異がある。2層は遺物包含層で、場所によっては暗褐色の2ａ層と、漸移層の2ｂ層に細別できた。層厚は平均して20～30cmであるが、大学の造成に伴って削平されている部分も存在する。2層には縄文時代早期や中期、晩期の遺物が含まれる。3層以下はローム層である。5層上面には川崎スコリア（2.6～3.2万年前：板垣ほか1980）のブロックが確認された。6層は6ａ層、6ｂ層に細分された。6ｂ層は愛島軽石層起源の軽石・岩片を含んでいる。7層は場所により、7層上部と下部の2層に細分された。7層下部では、上部に比べ、愛島軽石層起源の岩片が大粒で多く含まれる。8層は愛島軽石層（6.4～8万年前：年報2）である。ＡＱ・ＡＲ－19区深掘調査区では、8層以下の層が存在せず、7ｃ層直下が礫層となっている。9層は、場所により9ａ層、9ｂ層に細分された。9ｂ層は9ａ層より赤味が強い土色をしている。9層上面、8層との境にはマンガンの沈着が見られる。10層は、10ａ層、10ｂ層、10ｃ層の3層に細別された。10ｃ層は、10ａ層に比べ、砂が多く混ざり、全体に黒味を帯びている。また10ｂ層と10ｃ層の境には酸化鉄、マンガンの集積部分が認められた。11層は16枚に細別され、下の礫層起源の風化礫を多く含む層もある。12層は基盤の段丘礫層である。

また、調査区南西辺～南辺にかけて検出された地すべり痕に対応し、断面でも層位のずれや地割れ、空隙、崩落土などが確認された。これらは、2ｂ層以下の層に見られ、2ａ層には及んでいない。崩落土は、本来2ｂ～7層に相当する部分が混在していると考えられ、場所やレベルに応じて土質の違いが認められる。

3．検出遺構

検出された遺構は土坑3基、ピット14基である（図21、図版3～5）。また、人工的な遺構ではないが、地すべり痕も検出されている。

【1号土坑】

ＢＬ・ＢＫ－14区の3層上面で検出された。平面は長方形で、長軸方向はＮ－49°－Ｗである。長軸126cm、短軸62cm、深さ74cmを測る。底面中央には円形のピット（直径18cm、深さ38cm）が1基認められる。埋土は3層に分けられる。出土遺物はなく、時期は特定できないが、平面形・規模と底面のピットの存在から、陥し穴と考えられる。

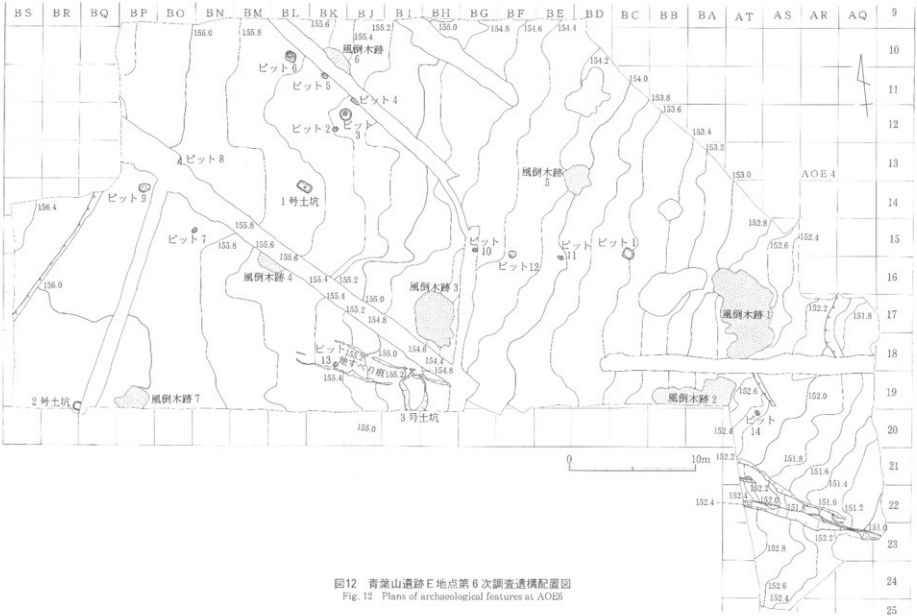


図12　青葉山遺跡E地点第6次調査遺構配置図
Fig. 12　Plans of archaeological features at AOE6

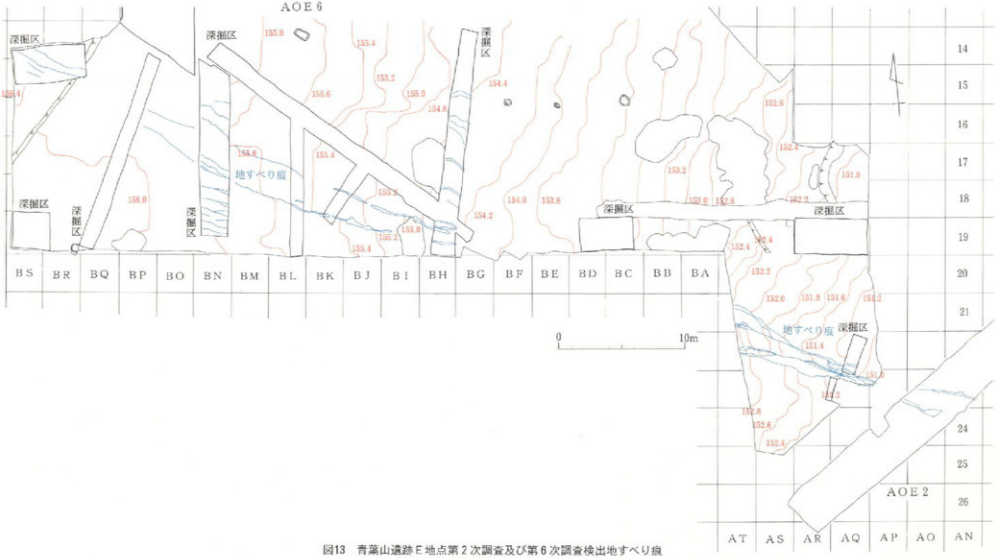


図13　青葉山遺跡E地点第2次調査及び第6次調査検出地すべり痕
Fig. 13　The landslide at AOE2 and AOE6

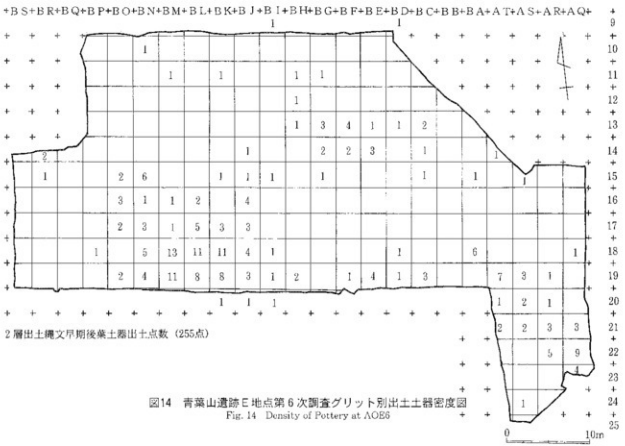


図14　青葉山遺跡E地点第6次調査グリット別出土土器密度図
Fig. 14　Density of Pottery at AOE6

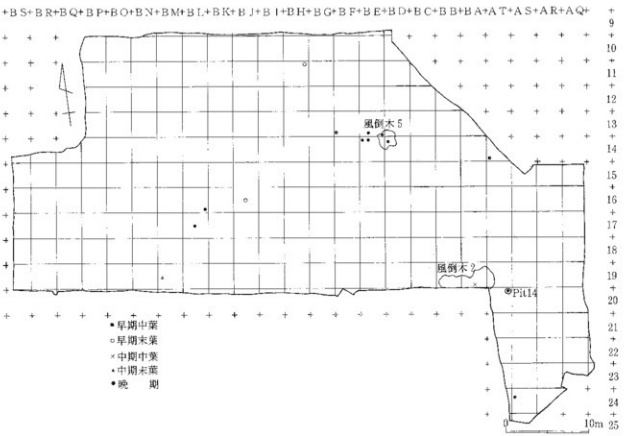


図15　青葉山遺跡E地点第6次調査出土土器分布図（縄文早期後葉以外の土器）
Fig. 15　Distribution of Pottery at AOE6

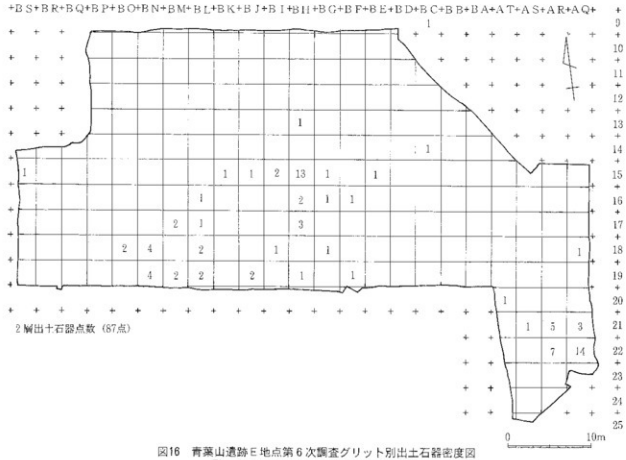


図16　青葉山遺跡E地点第6次調査グリット別出土石器密度図
Fig. 16　Density of Stone implements at AOE6

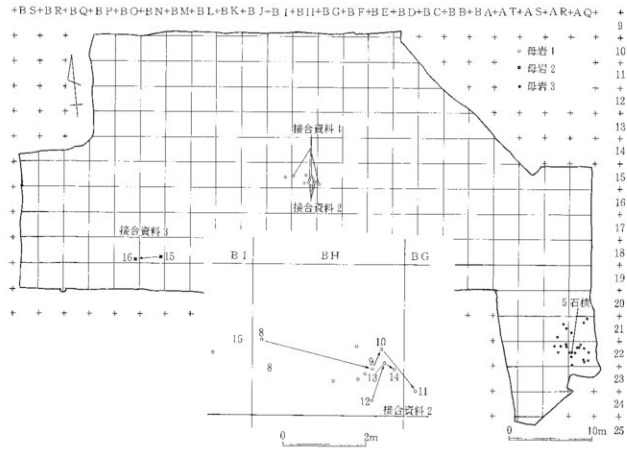
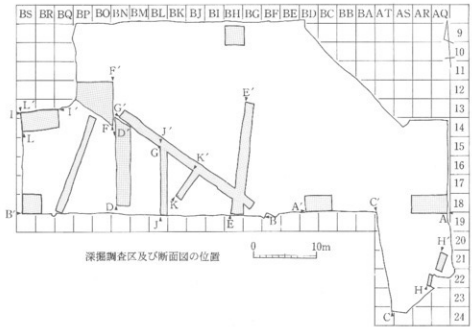


図17　青葉山遺跡E地点第6次調査出土石器接合関係図
Fig. 17　Distribution of refited Stone implements at AOE6



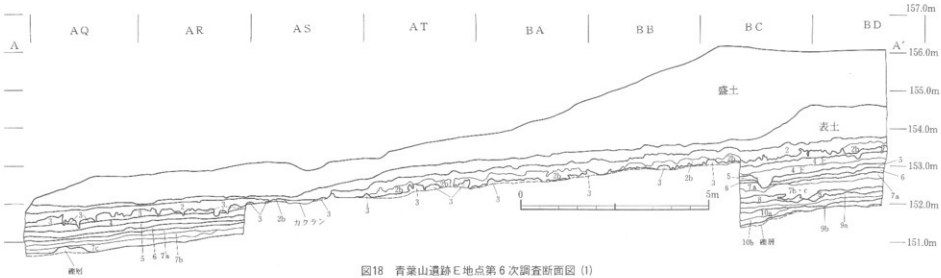


図18　青葉山遺跡Ｅ地点第６次調査断面図（1）
Fig. 18　Cross setion of exavation at AOE6 (1)

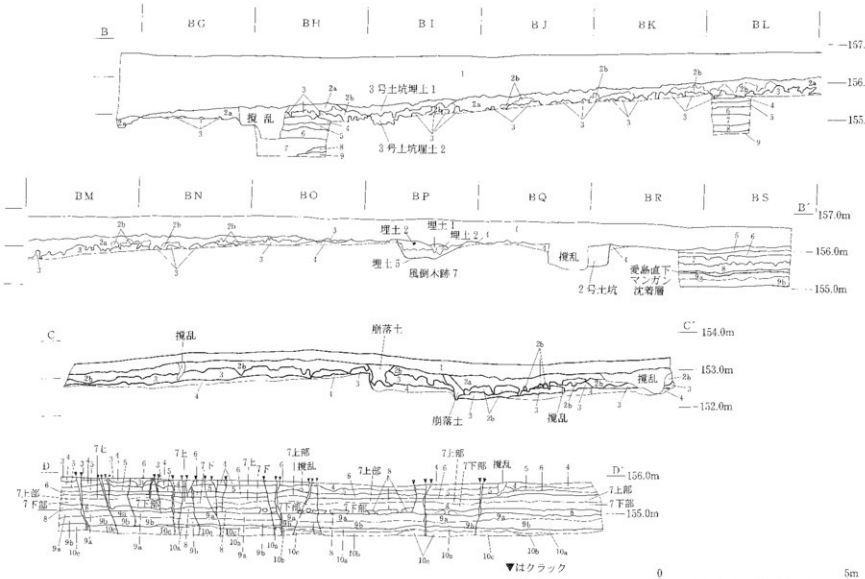


図19　青葉山遺跡E地点第6次調査断面図 (2)
Fig. 19　Cross setion of exavation at AOE6 (2)

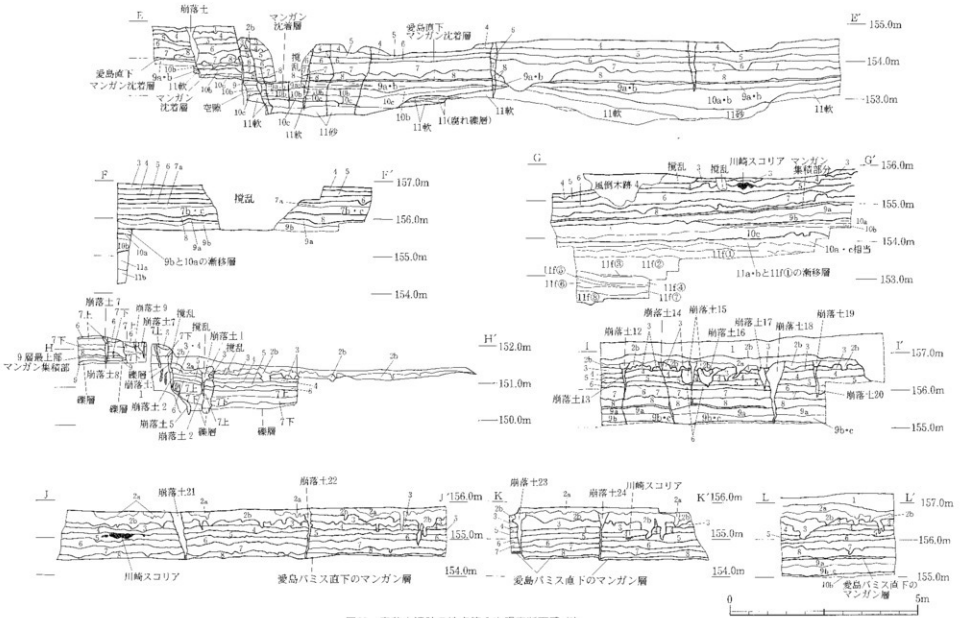


図20　青葉山遺跡E地点第6次調査断面図 (3)

Fig. 20　Cross setion of exavation at AOE6 (3)

基本層序上層注記

1 層	大学による２回の盛土
2 層	10YR3/4暗褐色と10YR4/6褐色が斑状に混じる　粘土質シルト　粘性弱　しまり強
3 層	10YR4.5/6灰色～黄褐色　やや赤味があり肉眼的には肌色に近い　シルト　粘性中　しまり中
4 層	10YR6/6明黄褐色　やや細かいシルト　粘性弱　しまり中（３層より弱）　白色パミスの微細粒を多く含む
5 層	10YR5/5にぶい黄褐色～黄褐色　シルト　粘性弱　しまり中　マンガン粒，白色パミス小粒を少量含む．川崎スコリアのブロックが認められる．
6a層	10YR6.5/5にぶい黄褐色～明黄褐色　粘土質シルト　粘性中　しまり中　マンガン粒，白色パミス小粒を少量含む
6b層	6a層に愛鷹軽石層起源の軽石，岩片を少量含む　他は6a層に同じ
7 層上部	10YR5.5/4にぶい黄褐色～にぶい黄橙色　粘土質シルト　粘性弱　しまり強　愛鷹パミス起源の軽石，岩片を多量に含む10cm程の円礫も疎に含む
7層下部	７層上部に比べ愛鷹起源のパミスの含有が多く，黄味がやや強く，しまりも強い　他は７層上部に同じ
7a層	7.5YR6.5/6橙色　粘土質シルト　粘性弱～中　しまり中～強　灰白，青灰色の愛鷹軽石起源の小岩片（径1cm程まで）を全体に含む　ごく微細なマンガン粒が全体に多く見られる
7b・c層	色調は7a層に同じ　粘土質シルト　粘性弱～中　しまり中～強　白・橙・青灰の愛鷹軽石起源の小岩片を多量に含む　7a層より粒が大きい　風化した黄色軽石が目立つようになる　ごく微細なマンガン粒が全体に認められる
8 層	愛鷹軽石層　ごく薄く，上面には凹凸も多いため，かなり撹乱を受けている
9 層	10YR5/3黄褐色　粘土質シルト　粘性強　しまり中～強　直下の礫層起源の礫を多量に含む　大粒のマンガンを若干含む
9a・b層	7.5YR6/6橙色　粘土質シルト　粘性弱　しまり中　マンガン小粒を多量に含む　風化が激しい
9a層	7.5YR6.5/6橙色　粘土質シルト　粘性中　しまり中～強　径10mm程のマンガン粒を非常に多く含む　8層との境にマンガンが多く沈着している　径2cm程の円礫を多く含む
9b層	7.5YR6/6橙色　粘土質シルト　粘性中　しまり中～強　9a層より赤味がある　細砂の含有が多く，マンガン粒も比較的多く見られる
10a層	10YR5.5/7黄褐色～明黄褐色　粘土質シルト　粘性強　しまり強　10b層より少ないが淡黄，灰白の細砂を全体に含む　白色、橙色の小岩片（径1～2mm）を多く含む　径1～2mmのマンガン粒を全体に多量に含む
10b層	10YR6/4と7/3にぶい黄橙色が斑状に混ざる　粘土質シルト　粘性中　しまり中～強　5YR8/4淡黄，8/1灰白の細砂ないしシルト質砂を小ブロック状に多く含む　礫層起源の径2～3cm程の小円礫を少量含む　径2mm程の白，橙色の小岩片も多い　径1mm程のマンガン粒を全体に含む
10c層	10YR6/6明黄褐色を主体とし，10YR8/1灰白色を斑状に含む　粘土質シルト　粘性弱　しまり中　砂粒が混ざる　10b層との境に鉄分とマンガンの集積が認められる
11a（上）層	7.5YR5/8明褐色と10YR5/8黄褐色の中間　10YR8/1灰白色が斑状に混ざる　粘土質シルト　粘性強　しまり中～強　灰白色周辺に鉄分が見られる　マンガンは小ブロック状で11ト層より多い
11b層	5Y7/1灰白色を主体とし，7.5R4/8赤色が点状，霜降状に混ざる　粘土　粘性強　しまり弱　マンガンも点状，筋状に見える
11c（ト）層	10YR6/6明黄褐色を主体とし，10YR8/1灰白色が5cm程の縞状に混ざる　粘性中　しまり中　粘土質シルト　細砂を若干含む　灰白色周辺に鉄分が見られる　小ブロック状のマンガンがわずかに見られる
11d層	10YR7/6明黄褐色を主体とし，10YR8/1灰白色を小ブロック状に全体に混ざる　砂質シルト　粘性強　しまり弱～中　鉄分が糸根状，鰓目状に認められる　マンガンは径2～20mm程のブロック状に含まれる
11e層	10YR7/6明黄褐色を主体とし，10YR8/1灰白色が小ブロック状に含まれる　11c層より灰白の割合が小さい　砂質シルト　粘性中　しまり弱～中　マンガンの入り方は11d層に近い　鉄分が糸根状に認められる
11f層	10YR8/1灰白色と10YR5/8赤色が斑状に混ざる　粘土質シルト　粘性中　しまり弱　上部にマンガンが細い縞状に見られる
11a・c層	10YR6/4鈍い黄橙色を主とし，10YR7.5/1灰白色が間隔の大きい縞目状に混ざる　粘土質シルト　粘性中～強　しまり強　パミス小粒（白，黄），細砂粒を全体に含む
11f①層	2.5YR7/6橙色と10YR8/1灰白色が霜降状に混ざる　粘土質シルト　粘性強　しまり中～強　多量の細砂～粗砂を含む　酸化鉄が多い
11f②層	2.5YR6.5/8橙色を主体とし，10YR8/1灰白色がブロック又は霜降り状に混ざる　粘土質シルト　粘性強　しまり中～強　上半には細砂粒を小ブロック状に多く含む　灰白色の周りに酸化鉄が多い
11f③層	色調は11f⑧に同じ　やや粗い砂が薄状に堆積　⑤程の厚み，広がりともない
11f④層	2.5YR6/6～6/8橙色を主とし，10YR8/1灰白色がブロック状（径１cm程）に混ざる　砂質シルト　しまり弱～中　粘性中　⑦より砂が少ない
11f⑤層	色調は11f③に同じ　やや粗い砂が薄状に堆積

11f⑥層　2.5YR6.5/8橙色を主体とし、10YR8/1.5灰白色が混ざる　砂質シルト　粘性中　しまり弱～中　11f⑦に似るが酸化鉄が特に多い

11f⑦層　2.5YR7/6～6/8橙色を主体とし、10YR8/2灰白色が小ブロック状に混ざる　砂質シルト　しまり弱～中　粘性中　11層の中では最も赤味が強い

11f⑧層　2.5YR6/8橙色　風化した礫と粗砂、礫砂は透明、白、青等を呈する

11(軟質)層　7.5YR7/6橙色と7.5YR8/1灰白色がごく細かく斑状に混ざる　砂質シルト　粘性弱　しまり中～強　縦方向のスジ状に7.5YR8/1灰白ないし白色の部分が認められる　また下部に行くほど細かな着降り状に灰白～白色が多く見られるようになる　礫層起源の風化した小礫を少量含む　マンガン小粒上部(～径5mm位)　に少量認められる　縦方向のクラックが多く見られる

11(砂)層　7.5YR7/6橙色を主体とし、7.5YR8/1灰白色が模長の霜降り状に混ざる　粘土質シルト　粘性中　しまり中～強　上部に粗砂を薄い横縞状に含む　11(軟質)層に比して灰白色の割合が多い

12層　10YR6/6明黄褐色と5/6黄褐色が斑状に混じる　粗砂、細砂、シルト～粘土と細砂が細かく互層をなす　しまり中～強(下部ほど強い)　粘性はシルト～粘土が強、他は弱　下には礫層起源と見られる白色、橙色の風化礫を含む　マンガン、酸化鉄とも多く見られ、ラミナの見えるところはラミナに沿って、その他は斑状に見られる　上にのる層との境目に特に多くのマンガンが見られ、かつ非常に固い

崩落土1　10YR4/4褐色を主とし、5/6黄褐色が斑状に混ざる　シルト　粘性弱　しまり中　小礫をわずかに含む

崩落土2　5～7層起源土が混ざる

崩落土3　10YR4/6褐色　シルト　粘性弱　しまり弱　黄褐色土ブロックを斑状に含み、極小～1cm程の礫が多く見られる

崩落土4　10YR4.5/6黄褐色～褐色　粘土質シルト　粘性中　しまり中　礫層起源の小円礫を多量に含む　3～7層上部起源土と礫層中の礫の混合破砕帯

崩落土5　10YR5.5/6明黄褐色～黄褐色　粘土質シルト　粘性中　しまり弱　礫層起源の円礫を極多量に含む　7層上～下部起源土と礫層中の混合破砕帯

崩落土6　10YR6/6明黄褐色　粘土質シルト　粘性中　しまり中　7層起源の破砕帯

崩落土7　10YR5/8～4/6　黄褐～褐色　粘土質シルト　粘性中　しまり中を主とし、10YR3/4暗褐色シルト　粘性弱　しまり弱が斑に混ざる　愛島パミス起源の黄色軽石の風化した物を多く含む　全体としてしまり弱

崩落土8　7層上部～9層に対応する土が上から順に認められるが、破砕されて元来の層よりしまりなく、それぞれの境界が不明瞭な状態を呈している

崩落土9　崩落土7と特徴同じ

崩落土10　崩落土7、9と同じ

崩落土11　マトリクスは7上～下層と同じ　ひびが入ったためにややしまりが弱い

崩落土12　2b層に比べ黒味が強い　またしまりがない

崩落土13　10YR5/4鈍い黄褐色　粘性極弱　しまり弱

崩落土14　2b層にほぼ同じ　ややしまりにかける

崩落土15　周囲に比べしまりがない　10YR5/4鈍い黄褐色　粘質シルト　しまり極弱　粘性極弱

崩落土16　10YR5/6黄褐色　粘質シルト　均質　しまり弱　粘性なし

崩落土17　基本的に18に同じであるがやや黄色味が強い

崩落土18　10YR4/3～5/4鈍い黄褐色　粘質シルト　しまり弱　粘性極弱　部分的に小さな空隙あり

崩落土19　10YR3/3暗褐色シルト　粘性なし　しまりなし

崩落土20　10YR5/4鈍い黄褐色　粘土質シルト　粘性極弱　しまり弱

崩落土21　地滑りによる亀裂　10YR5/6黄褐色　シルト　粘性弱　しまり弱　上部には2b層に由来する黒味がかった土も見られる

崩落土22　地滑りは2b層を切っており、2b層上面段階で生じ、その後2a層が堆積したと考えられる　10YR4/4褐色　シルト　粘性弱　しまり弱を主体とし、所々に腐った植物の根に由来すると考えられる黒色土が混じる　上部には2b層由来の土が見られる

崩落土23　10YR3/3暗褐色シルトを主体とし、2b層に似るが全体的には2b層に比べやや暗め　3層起源の黄褐色ロームブロックを含み不均質　粘性なし　しまり弱

崩落土24　地滑り時に生じた隙間を埋めている崩落土で、所々に空隙が残っている　主体をなすのは10YR5/4鈍い黄褐色粘土、しまり極弱く、粘性弱　空隙には植物の根が入り込んでいる箇所もありそうした部分には10YR2/1黒色シルトと10YR5/4鈍い黄褐色粘土粒子の混じったしまりのない土が埋まっている

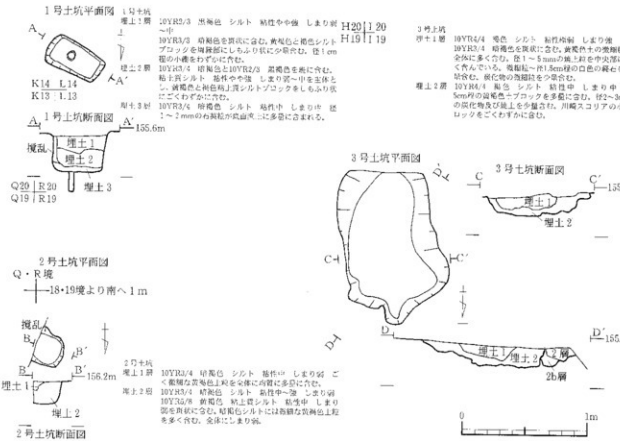


図21　青葉山遺跡E地点第6次調査1、2、3号土坑
Fig. 21　Plans and sections of pit1,2 and 3 at AOE6

【2号土坑】

BQ・BR－19・20区の3層上面で検出された。東半部は撹乱で破壊されている。残存部分の形態から、本来は長方形に近い平面形と推定される。長軸方向はN－30°－Wである。残存部で長軸60cm、短軸72cm、深さは44cmを測る。埋土は2層に分けられる。出土遺物はない。底面にピットは検出されていないものの、平面形、規模などから、陥し穴の可能性が高いと考えられる。

【3号土坑】

BH・BI－18・19区の2層上面で検出された。平面形は不整形を呈し、底面にも凹凸が激しい。長軸120cm、短軸82cm、深さ42cmを測る。埋土は2層で、出土遺物はない。

【ピット】

ピットは、3層上面で14基検出されている。埋土はすべて1層だけである。ピット1・3・9は径80～90cm、深さ30～40cmの円形で、ピット2・5・7・10・12・13・14は径30～40cm、深さ20cm程の円形である。また、ピット4・6・8は、不整円形である。遺物は、ピット13からは縄文時代早期の土器が、ピット14からは縄文時代晩期の土器がそれぞれ1点出土している。

4．出土遺物

(1)　遺物の出土状況

遺物は基本層２層上面、２層、遺構埋土、風倒木跡埋土、表土、撹乱から出土している。２層の遺物は細分が可能な範囲で、２ａ層、２ｂ層として取り上げた。遺構からの出土は、土器がピット13、14から各１点であり、特筆すべき特徴は見られない。また、風倒木痕１・３・５からは、縄文土器が１点ずつ、風倒木痕２からは、縄文土器と剥片石器が１点ずつ、それぞれ出土している。

図14、16は、２層から出土した土器、石器についてグリッド毎に出土点数を示したものである。土器については、ほとんどが縄文時代早期後葉の貝殻条痕文土器であり、その点数を示している。縄文時代早期後葉の土器は、調査区のほぼ全面におよぶものの、ＡＱ～ＡＴ－19～23区、ＢＣ～ＢＥ－19区、ＢＣ～ＢＧ－13・14区、ＢＪ～ＢＯ－17～19区など、いくつかの集中地点が見て取れる。その他の時期の土器については、図15にその出土位置を示している。縄文時代晩期の土器が、風倒木痕５と隣接するＢＥ－13・14区から５点出土しており、やや集中する傾向があるが、その他の時期については、それぞれ１、２点ずつの出土であり、特別な傾向は見られなかった。

石器では、大きくＡＱ・ＡＲ－21・22区、ＢＨ・ＢＩ－15～18区、ＢＬ～ＢＯ－17～19区と、３つの集中が見られる。図17は、母岩別に示した石器の接合関係図である。前述の３つの集中地点毎に、異なる母岩をもとにした石器の接合関係が存在している。また、これら石器の集中地点は、縄文時代早期後葉の土器の分布とは重なるものの、縄文時代晩期など他の時期の土器の分布とは一致していない。

これらのことから本調査区は、隣接する第３次調査、第４次調査で明らかとなった縄文時代早期後葉の集落と一連のものと捉えられる。また、縄文時代の他の時期、特に縄文時代晩期については、本調査区の北側にある第４次調査においても土器の集中地点が確認されており、なんらかの生活域が存在するものと考えられる。

(2)　縄文土器

縄文土器は240点出土した。早期中葉の土器が８点、後葉の上器が225点、末葉の土器が１点、中期中葉の土器が２点、中期後葉の土器が１点、晩期の土器が８点である。これらのうち口縁部、底部、および条痕以外の文様が施文されているもので、残存状態のよいものを抽出し、31点を資料化した（図22・23　図版７・８）。観察表の項目記載方法は年報12に準拠している。

早期中葉の土器は、図22－５・６・17である。胎土に繊維は含まれていない。５・６は尖底土器の底部である。５は底部が小さめでやや鋭い尖底部であるが、６は緩やかな底部に乳房状の尖底部が作られている。同様の底部は、第３次調査においても出土している。17は体部に斜位の貝殻沈線文が施文され、内面は比較的丁寧に磨かれている。平坦口縁で外面側に刻みが入る。これらの特徴の土器は、東北地方南部の大寺式、常世式、北部の寺の沢式、吹切沢式といった早期中葉貝殻沈線文土器に認められる。

早期後葉の貝殻条痕文土器は、図22－７～15、図23－16、17である。器形全体がわかる資料はないが、体部がわずかに屈曲するものが存在する（13・14）。口縁部端面は内削ぎのもの（９・10・12）、丸みを帯びるもの（７）、平坦なもの（８）、先が尖るもの（11）などが見られた。小波状口縁で口唇部外面側のみを口縁に直行する方向で刻むもの（９・11・12）、が多く、その他に口唇部外面のみを斜めに刻むもの（10）、口唇部全体を斜めに刻むもの（７）などが見られる。小破片で文様の展開は不明瞭であるが、刺突列（10・12・14）、斜格子文（15・16）、無文（７・11）などが確認された。早期後葉の土器は第3次調査で一括して出土しており、文様や調整方法などはこれらと非常によく共通する。

早期末葉の土器は、図23－18である。器形は体部上半が外反し、膨らみをもって体部下半へとつながる。砲弾形の深鉢であると考えられる。上半は、縄文が施文された上に数条の沈線文が展開する。内面は横ナデされてい

る。このような土器は、東北地方中南部の梨木畑式土器に見られ、宮城県小梁川遺跡から類例が出土している（真山ほか1987）。

中期中葉の土器は、図23－19・30である。19は緩やかに膨らむ体部破片で、縄文を施文した後、沈線による渦巻文が描かれている。30は頸部がくびれ、口縁部が内傾する器形の深鉢と考えられる。ＲＬ縄文が施文された後、隆沈線による横位曲線文が展開する。このような土器は、仙台市高柳遺跡（仙台市教育委員会1995）、上野遺跡（仙台市教育委員会1986、1989）などでまとまった資料が出土しており、中期中葉の大木８ａ式、８ｂ式に位置付けられる。

中期後葉の土器は、図22－２の土器である。深鉢形土器の体部破片で、断面三角形の隆線にＲＬ縄文が充填された文様である。隆線により区画された楕円、「Ｊ」、「Ｕ」字などの曲線文様が展開すると考えられる。このような土器は、仙台市川添東遺跡（仙台市教育委員会1993）、北前遺跡（仙台市教育委員会1989）、梨野Ａ遺跡（仙台市教育委員会1983）、沼遺跡（仙台市教育委員会1992）、山田上ノ台遺跡（仙台市教育委員会1987）、下ノ内遺跡（仙台市教育委員会1985）、観音堂遺跡（宮城県教育委員会1986）などで出土しており、大木９、10式に位置付けられる。

晩期の土器は、図22－１・３・４、図23－20～23、27～29、31である。１は鉢形土器である。体部は無文で、口縁部外面に１条の沈線が見られるが明瞭ではない。沈線内に赤色顔料がわずかに残存している。口縁部端面は内削ぎされており、器面は内外面とも磨かれている。20・31は口頸部にくびれをもつ深鉢形土器である。頸部は１条の沈線により区切られており、体部には比較的細かい単節ＬＲ縄文が施文されている。３・４、21～23は縄文の施文される体部破片である。３・21は、比較的細かい単節ＬＲ縄文が施文されており、器厚が均一で丸みを帯び、内面が丁寧に磨かれることから、晩期中葉の鉢形土器ではないかと考える。これらの土器は仙台平野周辺での出土例が少ないが、仙台市赤生津遺跡（仙台市教育委員会1990）、芦見遺跡（仙台市教育委員会1988）、郡山遺跡（仙台市教育委員会1992）、門野山囲遺跡（仙台市教育委員会1983）などにわずかに見られる。また、青葉山遺跡Ｂ地点や青葉山遺跡Ｅ地点第４次調査においても、晩期の土器が出土している。

また、時期不明とした土器は、24～26、29である。24・25は縄文の特徴や、晩期の土器の集中地点付近から出土していることなどから、晩期中葉から後葉の土器である可能性が高い。29は単節ＬＲ縄文が施文された鉢形土器である。口唇部は平坦に作られ、やや厚みがある。縄文のみの施文のため時期は特定できない。

(3) 石　器

石器は、２層から43点、２ａ層から16点、２ｂ層から９点、風倒木跡埋土から１点、表土から６点、撹乱から１点の総計75点が出土している。また、剥片２点を表採した。石鏃１点、石錐１点、石匙１点、スクレイパー１点、石核１点、凹石１点、石皿１点、剥片49点、砕片11点に分類した（図24～26　図版８・９）。

１は珪化凝灰岩製の石鏃である。先端部から中程にかけて欠損している。交互剥離による丁寧な加工が行われているが、ｂに素材面を若干残している。基部に深い抉りが入る。長さ15.6mm、幅18.2mm、厚さ1.9mm、重量0.8ｇ。

２は頁岩製の石錐である。素材剥片の尖った先端部を活かし、ａ左側縁への加工により錐部を作り出している。ａ右側縁には微細剥離が認められる。ａ右側縁は折れにより破損している。長さ40.1mm、幅14.1mm、厚さ7.2mm、重量4.8ｇ。

３は頁岩製の石匙である。刃部は折れにより欠損している。両面に素材面を残し、周辺は交互剥離により丁寧に加工され、基部が作り出されている。長さ28.6mm、幅28.1mm、厚さ12.6mm、重量15.4ｇ。

４は頁岩製のスクレイパーである。ａに自然面と節理面を有する大型の横長剥片を素材としている。素材剥片先端側はｂからの急斜度の加工により刃潰しが行われている。素材剥片の打面側には、ｂからの加工により丸い

刃部を作り出している。長さ39.2mm、幅70.6mm、厚さ16.1mm、重量53.1g。

5は珪化凝灰岩製の石核である。d、fに自然面を大きく残す。eは折れ面である。この折れ以前にbにおいて大きめの剥片を剥離し、折れ以後eを打面としてaにおいて2枚の大きめな剥片を剥離している。5には同一母岩の剥片及び砕片が数10点みられるが、接合はしない。長さ38.4mm、幅90.5mm、厚さ20.4mm、重量201.4g。

6は安山岩製の凹石である。円礫を素材とし、両面に浅い敲打痕を有する。aでは中央に敲打痕を有するのに対して、bは平坦で中央より若干ずれた面に敲打痕を有する。長さ72.1mm、幅52.1mm、厚さ29.8mm、重量195.6g。

7は輝石石英安山岩製の石皿である。大形の扁平な礫を素材としている。破損により全体の大きさは分からない。a、bに敲打痕と擦痕を有する。敲打痕内にも擦痕が認められる。擦痕は多方向にわたる。長さ197.2mm、幅124.1mm、厚さ48.8mm、重量2378.4g。

また、同一母岩を3例確認した（表6）。（ここでいう母岩とは同じ原石から剥離されたと考えられる石器が2点以上のものを指す。）母岩1は珪質頁岩である。剥片12点からなる。接合資料が2例みられた(接合資料1・2)。接合資料1は剥片4点が接合した（8～11）。11を除く3点は基部を欠損している。打面を固定し、同一方向からの打撃により8、9、10、11の順に剥離が行われている。自然面をほとんど持たない接合資料1は打面と作業面を固定し剥片剥離を行っている。接合資料2は剥片3点が接合した(12～14)。接合資料2－aには接合資料2－dを打面とした剥片の剥離面が残されている。dには12の腹面と同一方向からの打撃による剥離面が残されている。12の剥離により生じた剥離面を打面とし、13、14が連続的に剥離されている。打面調整などは行われていない。以上のことから、次のように剥片剥離が行われている。まず12の剥離以前に、自然面を含む剥片が12の腹面と同一方向からの打撃により剥離される。次に90度の打面転位を行い、dを打面として1～数枚の剥片を剥離する。その後、90度の打面転位を行い、aを打面として12を剥離する。さらに90度の打面転位を行い、12の剥離により生じた剥離面を打面として、13、14を連続的に剥離している。接合資料2は自然面を多く有し、打面転位を繰り返しながら剥片剥離を行っている。接合資料1と2はBH－15・BG－15区からまとまって出土している。

母岩2は頁岩である。剥片2点からなる。接合資料が1例みられた。接合資料3は剥片2点が接合した(15、16)。打面を固定し、同一方向からの打撃により15、16の順に剥離が行われている。2点はBO・BN－18区から出土している。

母岩3は珪化凝灰岩である。石核1点、剥片24点からなる。これらは接合しなかったが、AR・AQ－21・22区から出土しており、約半径3mの範囲内に集中している。

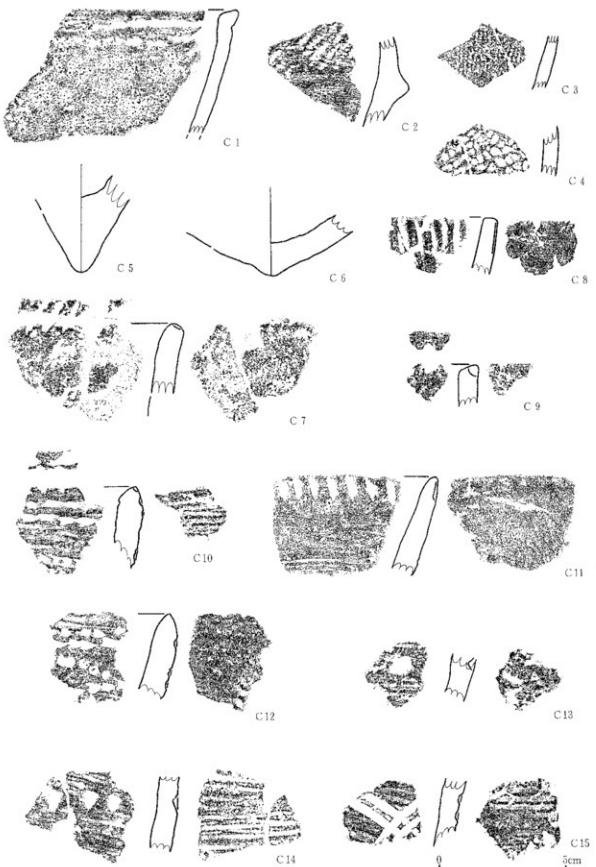


図22　青葉山遺跡E地点第6次調査出土土器 (1)
Fig. 22　Pottery from AOE6 (1)

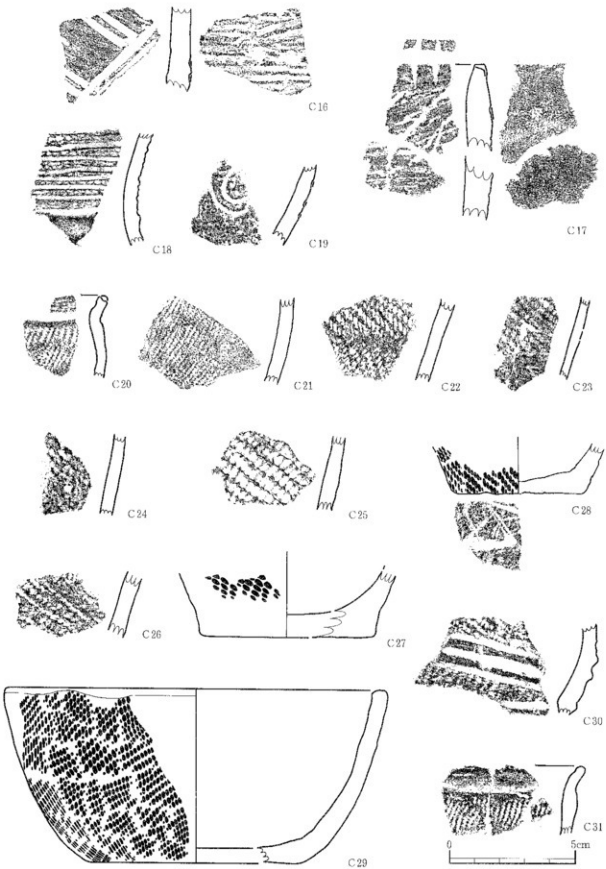


図23　青葉山遺跡E地点第6次調査出土土器 (2)
Fig. 23　Pottery from AOE6 (2)

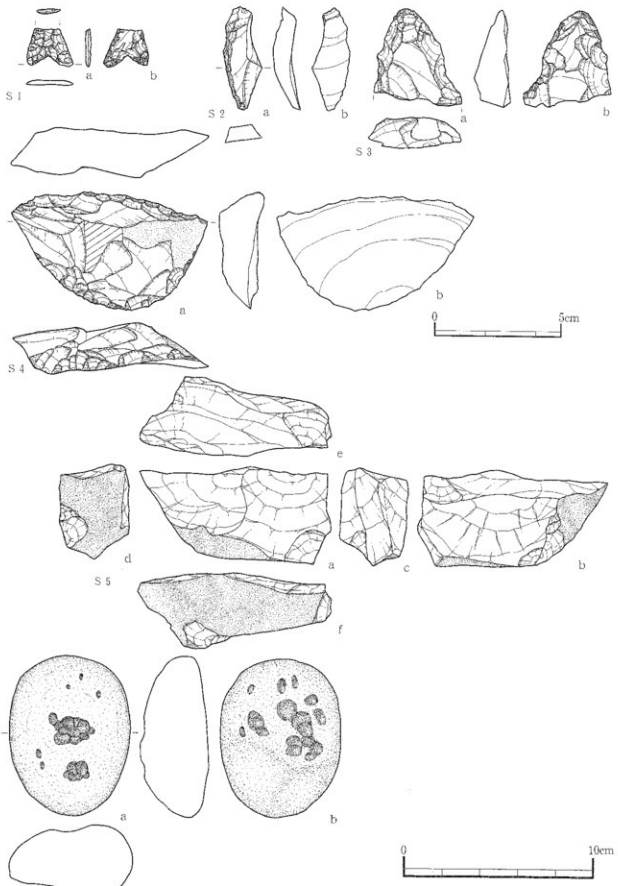


図24　青葉山遺跡E地点第6次調査出土石器 (1)
Fig. 24　Stone implements from AOE6 (1)

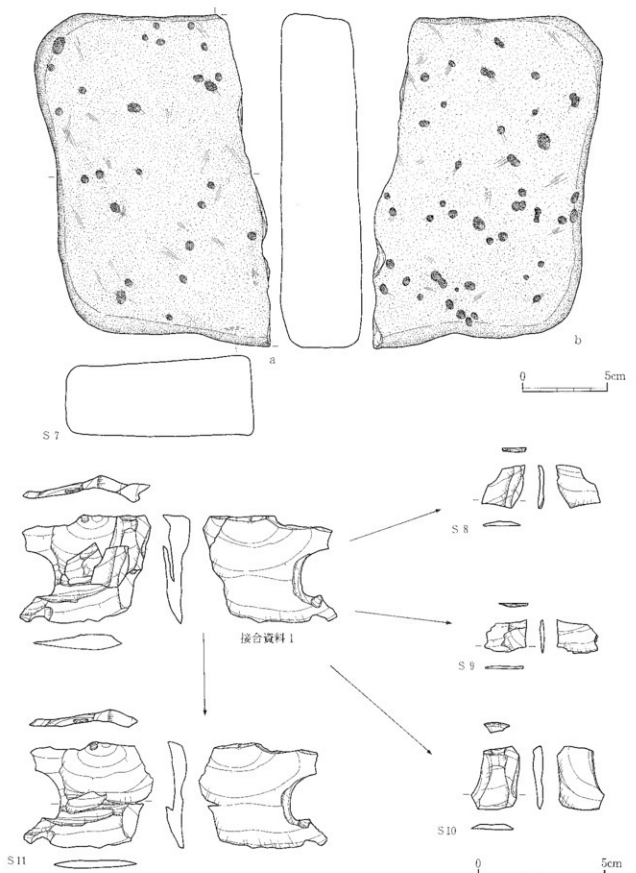


図25　青猫山遺跡E地点第6次調査出土石器 (2)
Fig. 25　Stone implements from AOE6 ②

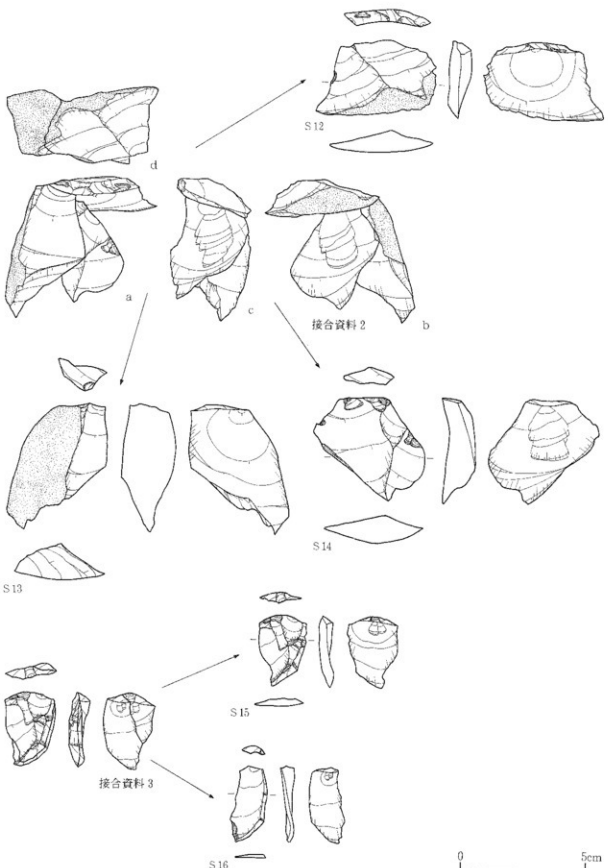


図26　青葉山遺跡E地点第6次調査出土石器 (3)
Fig. 26　Stone implements from AOE6 (3)

表5　青葉山遺跡E地点第6次調査出土土器観察表
Tab. 5　Attribute list of pottery from AOE6

番号	地区	遺構・層位	時　期	部　位	縄面形	口縁形態	器面調整	文　様	焼化物	器厚	胎土	備考	図	図版
C1	AT20I5	PIT14埋土	晩期後葉	口縁～体部	内削	平坦	内ミガキ・外ミガキ	無文	無	5.5	無		22	7
C2	BA19区	黒斑木底3埋土	中期末葉	体部	不明	不明	内・外N	断面三角形の隆線と充填縄文による文様	無	6.5	無		22	7
C3	BE13区	黒斑木底3埋土	晩期？	体部	不明	不明	内ミガキ・外N	LR縄文	外面	4.5	無		22	7
C4	BD14区	黒斑木底3埋土	晩期？	体部	不明	不明	内不・外不	LR羽状縄文	無	6.0	無	赤色顔料	22	7
C5	AT14区	2層(?)	早期中葉	底部	不明	不明	内N・外N	無文	無	10.0	無		22	7
C6	BP13区	2層	早期中葉	底部	不明	不明	内N・外N	無文	無	9.0	無		22	7
C7	BM17区	2層上面	早期後葉	口縁部	丸(3)	Bd	内N・外N	E	無	8.5	無		22	7
C8	BN19区	2層	早期後葉	口縁部	平坦(4)	A	内ミガキ・外S	E	無	7.0	無		22	7
C9	AR19区	2層(?)	早期後葉	口縁部	内削(1)	Ba	内N・外N	E	無	7.5	無		22	7
C10	AR22区	2a層	早期後葉	口縁部	内削(1)	Bb	内S・外S	Da	無	9.5	多		22	7
C11	BR11区	2層下部	早期後葉	口縁部	尖る(5)	Ba	内N・外S	E	無	8.5	無		22	7
C12	AS20区	2b層	早期後葉	口縁部	内削(1)	Ba	内N・外S	Da	無	9.5	少		22	7
C13	BC19区	2層	早期後葉	体部崩曲部	不明	不明	内S・外S	D	無	8.0	少		22	7
C14	BH19区	2層	早期後葉	体部崩曲部	不明	不明	内S・外S	Da	無	8.0	少		22	7
C15	AQ22区	2a層	早期後葉	体部	不明	不明	内S・外S	Aa	無	9.0	少		22	7
C16	AQ23区	2b層	早期後葉	体部	不明	不明	内S・外S	Aa	無	8.5	少		23	7
C17	BJ16区 BJ15区	2層	早期中葉	口縁～体部	平坦	Ba	内N・外S	貝殻沈線文	無	10.0	無		23	8
C18	BI7I区	2層上部	早期末葉	体部	不明	不明	内ミガキ・外不	縄文条痕文	無	5.5	無		23	8
C19	BM19区	2層	中期中葉	体部	不明	不明	内不・外不	渦巻文	外面	6.0	無		23	8
C20	BE14区	2層	晩期後葉	口縁～体部	平出	押圧	内N・外不	LR縄文	無	4.0	無		23	8
C21	BE13区	2層	晩期？	体部	不明	不明	内ミガキ・外不	LR縄文	外面	5.0	無		23	8
C22	AS24区	2層	晩期？	体部	不明	不明	内不・外不	RL縄文	内面	5.0	無		23	8
C23	BL17区	2層上面	晩期？	体部	不明	不明	内ミガキ・外不	LR縄文	無	3.5	無		23	8
C24	BG13区	2層	不明	体部	不明	不明	内ミガキ・外不	LR縄文	無	4.5	無		23	8
C25	BE14区	2層	不明	体部	不明	不明	内ミガキ・外不	LR縄文	無	6.5	無		23	8
C26	BG22区	2a層	不明	体部	不明	不明	内N・外不	LR縄文	無	7.0	無		23	8
C27	BF14区	2層	晩期？	底部	不明	不明	内N・外不	LR縄文	無	6.0	無		23	8
C28	BL16区	2層上面	晩期？	底部	不明	不明	内N・外不	RL縄文	無	6.0	無		23	8
C29		1層	晩期？	口縁～底部	平坦	平出	内N・外不	LR縄文	無	7.5	無		23	8
C30		表土	中期	体部	不明	不明	内N・外N	隆沈線による楕位曲線文	無	6.5	無		23	9
C31		表土	晩期	口縁～体部	平出	押圧	内ミガキ・外ミガキ	LR縄文	無	6.0	無		23	8

※早期後葉の土器に関しては、第3次調査で良好な資料が出土しており、端面形・口縁形態器面調整・文様の分類は年報12に準拠している。
器面調整は、S=貝殻条痕文　N=貝殻以外の調整具によるナデ　4=4調整の種類が不明
器厚の単位はmm　胎土欄は胎土中の繊維の多少を示している

表6　青葉山遺跡E地点第6次調査出土石器観察表
Tab. 6　Attribute list of stone implements from AOE6

No.	出土地区	層位・遺構	器　種	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	石　材	備考	図	図版
S1	AR21区	2層	石匙	15.6	18.2	1.9	0.8	珪化凝灰岩		24	8
S2	BH15区	2層	石錐	40.1	14.1	7.2	4.8	頁　岩		24	8
S3	BH17区	2層	石匙	29.6	28.1	12.6	15.4	頁　岩		24	8
S4	BN18区	2層	スクレイパー	39.2	70.6	16.1	53.1	頁　岩		24	8
S5	AQ22区	2a層	石核	38.4	90.5	20.4	201.4	珪化凝灰岩	母岩3	24	8
S6	BH17区	2層	凹石	72.1	52.1	29.8	195.6	安山岩		24	9
S7	AT21区	2層	石皿	197.2	124.1	48.8	2378.4	黒石石英安山岩		25	9
S8	BH15K	2層	剥片	15.9	13.9	1.9	0.6	珪質頁岩	母岩1	25	9
S9	BH15区	2層	剥片	10.7	15.9	1.3	0.5	珪質頁岩	母岩1	25	9
S10	BH15区	2層	剥片	25.1	17.9	4.1	2.2	珪質頁岩	母岩1	25	9
S11	BG15区	2層	剥片	41.7	46.2	5.8	11.7	珪質頁岩	母岩1	25	9
S12	BH15区	2層	剥片	28.7	41.6	8.2	13.5	珪質頁岩	母岩1	26	9
S13	BH15区	2層	剥片	36.2	35.1	20.1	35.2	珪質頁岩	母岩1	26	9
S14	BH15区	2層	剥片	40.3	39.2	10.9	16.8	珪質頁岩	母岩1	26	9
S15	BN18区	2層	剥片	27.2	18.9	5.1	2.5	頁　岩	母岩2	26	9
S16	BO16区	2層	剥片	29.8	12.9	1.9	1.1	頁　岩	母岩2	26	9

表7　青葉山遺跡E地点第6次調査母岩観察表
Tab. 7　Attribute list of parent rock from AOE6

母岩No.	色　調	特　徴	自然面の特徴
1	灰褐色（7.5YR5/2）・部分的にオリーブ黒色（5Y3/1）の縞が入る。	黄灰色(2.5Y6/1)を呈し、所々に灰白色(2.5Y8/1)の塊点が混じる。	
2	褐灰色（10YR6/1）	白色粒子が若干混じる。	自然面を持たない。
3	灰白色（2.5Y8/2）	所々に明赤褐色(5YR5/6)と明黄褐色(10YR6/6)の縞様が入る。	にぶい赤褐色(5YR4/4)を呈する。

5．仙台市青葉山遺跡Ｅ地点に認められる埋没引張亀裂群について

東北大学大学院理学研究科地理学教室　大月　義徳

(1) はじめに

仙台市街地西郊、青葉山丘陵に位置する青葉山遺跡E地点第６次調査区（ＡＯＥ６）において、地表下に埋没した多数の引張亀裂群が見いだされた。本稿は同亀裂群の産状を報告すると共に、それらの成因等について若干の考察を行うものである。観察の機会を与えていただいた東北大学埋蔵文化財調査研究センターの方々、とくに藤沢敦氏、関根達人氏には記して御礼申し上げる。

(2) 青葉山遺跡Ｅ地点周辺の地形地質

青葉山遺跡Ｅ地点は東北大学大学院理学研究科地学棟南側一帯に位置し、1984年以来数次にわたって調査が重ねられている（東北大学埋蔵文化財調査委員会1986、東北大学埋蔵文化財調査研究センター 1999a・1999b・2000）。このうち第６次調査区（ＡＯＥ６）は、東北大学サイクロトロン・ラジオアイソトープセンター東隣に位置しており（図11）、その標高は151～156 mに及ぶ。

青葉山遺跡Ｅ地点を含む青葉山丘陵は仙台市街地の西～南西方に位置し、丘頂部は標高の異なる４面の高位河成段丘面（高位より青葉山Ⅰ～Ⅳ面）に相当する。青葉山面群はいずれも第四紀中期更新世（後半？）に形成されたと考えられ、このうち当地点の立地する青葉山Ⅲ面とその上位の青葉山Ⅱ面とは、それぞれの地形面を被覆する示標テフラの差異から明らかに形成時期（離水時期）の異なる段丘面と判断される（大月1987・1994）。

青葉山Ⅲ面を構成する段丘堆積物（以下、青葉山Ⅲ面構成層）を覆う風成火山灰質細粒土層（いわゆる「ローム層」）中には、下位より安達火山起源の愛島軽石層（後期更新世初頭～８万年前：板垣1985、蟹沢1995、愛島ほか2001）、蔵王火山起源の川崎スコリア層（３万年前前後：板垣ほか1981）などの示標テフラ層が挟在され、これらより年代の古い、例えば青葉山Ⅰ・Ⅱ面上に認められる中期更新世示標テフラ群は認められない。このことは当次調査区での試掘断面における基本層序とも調和的であり、すなわち青葉山Ⅲ面構成層が12・11・10層として、愛島軽石層が８層として、また川崎スコリア層が５層上部に断片的に産出するのがそれぞれ確認される（図18～図20）。

(3) 埋没引張亀裂群の産状・成因・発生時期

図13に示されるように、第６次調査区南西辺～南辺においてほぼＮ－70°－Ｗの走向を有する高角な正断層性亀裂がいくつか認められる。これらは２ｂ層～12層中に存在し、とくに顕著なものは明瞭な垂直変位が確認され（図20）、例えばＨ－Ｈ’断面では青葉山Ⅲ面構成層の礫層上面に約１ｍの高低差が生じているのが観察される。またＥ－Ｅ’断面では、数条の亀裂によって12層（風化した段丘礫層であり青葉山Ⅲ面構成層の主相）等が階段状に計１ｍ余りの垂直変位を被り、加えて同断面における最も変位の大きい亀裂下部に沿って最大幅10cm程度の空隙が発掘された（図版６－５）。これらの亀裂群による総変位量の大きい箇所はＨ－Ｈ’断面～Ｃ－Ｃ’断面周辺、およびＥ－Ｅ’断面～Ｋ－Ｋ’断面周辺であり、とくにＥ－Ｅ’断面～Ｋ－Ｋ’断面周辺では、主として２条の亀裂による変位と空隙が３層上面に表出し、同面上にてほぼ連続的に追跡可能な様子が看取される（図版３－５、図版６－４）。またこれらの亀裂群はＫ－Ｋ’断面より西側にて垂直変位が急減し、Ｄ－Ｄ’、Ｌ－Ｌ’断面では垂直変位のほとんど認められない開口亀裂として多数出現し、開口部は２ｂ層以下の混合物（時に破砕されている）により埋積されている（図版６－７・８）。Ｈ－Ｈ’断面の東側直近に位置する第２次調査区において、

やはり同様の引張亀裂群（垂直変位量は総計約1.2 m）の存在が先に報告されているが（東北大学埋蔵文化財調査研究センター 1999a）、これらは出現位置からみて当次調査区の亀裂群と連続することは確実である。第２次調査区のものを含めて、以上の亀裂群は少なくとも80m弱にわたり追跡される。

上記諸断面にみられる変位性状から、これらの亀裂群は北北東－南南西方向に最小圧縮主応力軸（最大引張主応力軸）が配置される応力下で発生したと考えられるが、これは現在の広域的造構応力場（例えば、中田ほか1978、大月・安藤1999）とは大きく性格を異にするものといえる。つまり、ここでの引張亀裂群は活構造等とは無関係であり、ごく局所的に発生したもの、より具体的には垂直変位量が最大に達する第２次調査区～Ｈ－Ｈ’～Ｅ－Ｅ’付近から北北東方向への地すべり性の土塊移動に伴い発生したと考えられる。しかしながらこの亀裂群は、図13にみられるように調査区内の南側に比較的密集して視認され、逆に調査区北辺および第３次・第４次調査区においては開口亀裂も含めて認められないことから（東北大学埋蔵文化財調査研究センター 1999b・2000）、土塊移動を促進するすべり面が地下広く存在することを想定するのは困難である。これより、上記亀裂群は地すべり発生・発展段階のごく初期に滑落崖頭部の陥没のみが生じた状態、すなわち地すべりの初生的変位[注]に伴い発生したと推察される。

土塊の移動方向は、第６次及び第２次調査区に隣接する青葉山２号道路の南東側開析谷から派生する緩やかな谷地形へ向かったものと考えられる。また、この開析谷に近接するため段丘面縁辺が重力的に不安定であったことが一因となり、両調査区に地すべりによる初期変位が生じ易くなった可能性も指摘される。

当亀裂群は２ｂ層基底まで追跡され、２ａ層・１層には覆われ現在は地表下に埋没している。また前述した開口部充填物の特徴も併せて考慮すると、２ｂ層の堆積・生成時ないしその直後に引張亀裂群が発生したと推定される。青葉山遺跡Ｅ地点では、当次調査区から北に約150m離れた第１次調査区においても、類似の亀裂群の存在が確認されている（東北大学埋蔵文化財調査委員会1986）。これらの亀裂群が相互に直接連続している可能性は小さいと思われるが、亀裂群の発生時期に共通性がみられる点は特筆に値する。

注）類似する「初生地すべり」という用語は、岩盤斜面に発生する岩盤すべりの初期的状態を指すことが多い（例えば、古谷1996など）。本調査区で想定される地すべりにおいて、地下の（潜在的）すべり面の形状・傾斜等が不明なため、地すべり移動体が青葉山Ⅲ面構成層の下位の基盤岩にまで及ぶか否かは判断できないが、現在のところ岩盤すべりである可能性は小さいと思われ、ここでの意味は必ずしも上記「初生地すべり」に限定されるものではない。

〈引用・参考文献〉

古谷尊彦　1996『ランドスライド　地すべり災害の諸相』古今書院

板垣直俊　1985「仙台およびその周辺地域に分布する愛島軽石層」『東北地理』第37巻　pp.79～80

板垣直俊・豊島正幸・寺戸恒夫　1981「仙台および周辺地域に分布する洪積世末期のスコリア層」『東北地理』第33巻　pp.48～53

蟹沢聰史　1985「仙台市および周辺に分布する愛島軽石とその中の深成岩片について－噴出源の推定と極端にK$_2$Oに乏しいトーナル岩の存在－」『岩鉱』第80巻　pp.352～362

中田　高・大槻憲四郎・今泉俊文　1978「仙台平野西縁・長町－利府線に沿う新期地殻変動」『東北地理』第28巻　pp.111～120

大月義徳　1987「宮城県中南部の中期更新世示標テフラ」『東北地理』第39巻　pp.268～282

大月義徳　1994「(3)山地・丘陵地の地形」『仙台市史 特別編１ 自然（Ⅱ.自然の現在のすがた　2．地形と地質）』pp.56～69　仙台市史編さん委員会編

大月義徳・安藤優子　1999　「仙台市太白区南部に見られる断層露頭－テフラ層序と断層活動期の再検討を中心として－」『季刊地理学』第51巻　pp.201～208
東北大学埋蔵文化財調査委員会　1986　『東北大学埋蔵文化財調査年報』2
東北大学埋蔵文化財調査研究センター　1999a　『東北大学埋蔵文化財調査年報』11
東北大学埋蔵文化財調査研究センター　1999b　『東北大学埋蔵文化財調査年報』12
東北大学埋蔵文化財調査研究センター　2000　『東北大学埋蔵文化財調査年報』13
鷺島正幸・早田　勉・北村　繁・新井房夫　2001　「仙台地域における台ノ原段丘面の形成時期」『第四紀研究』第40巻　pp.53～59

6．まとめ

今回の調査では、第３次調査区、第４次調査区に連続する縄文時代早期後葉の貝殻条痕文土器の分布が認められた。早期後葉以外の遺物では、これに先行する貝殻腹縁文を有する土器や、後続する縄文条痕文を有する土器、また縄文時代中期の土器が新たに確認され、第４次調査で集中地点が確認された縄文時代晩期の土器も出土している。また、時期は明確ではないが、縄文時代の陥し穴と考えられる土坑も検出された。青葉山遺跡Ｅ地点が縄文時代の広い時期に渡たる活動の場であったことがうかがえる。

また、調査区南西辺～南辺において、北西方向に走る地滑り痕も検出されている。地滑り痕は、第１次調査、第２次調査でも確認されており、特に第２次調査とは位置的な関係から連続しているものと考えられる。

〈引用・参考文献〉

相原淳一　1990　「東北地方における縄文時代早期後葉から前期にかけての土器編年－仙台湾周辺の分層発掘資料を中心に－」『考古学雑誌』第76巻第１号　pp.１～65

板垣直俊ほか　1981　「仙台およびその周辺地域に分布する洪積世末期のスコリア層」『東北地理』第33巻第１号　pp.48～53

大川清・鈴木公男・工楽善通　1996　日本土器辞典

大月義徳　1987　「宮城県中南部の中期更新世指標テフラ」『東北地理』第33巻第４号　pp.268～282

岡本勇編　1982　『縄文土器大成1　早期・前期』

後藤勝彦　1968　「宮城県七ヶ浜町吉田浜貝塚(1)」『仙台湾周辺の考古学的研究』宮城県の地理と歴史第３集　pp.1～20

瀬川裕市郎　1982　「条痕文土器」『縄文文化の研究』3　pp.121～134

芹沢長介・林謙作　1965　「岩手県蛇王洞洞穴」『石器時代』第７号　pp.67～87

仙台市教育委員会　1995　『高柳遺跡』　仙台市文化財調査報告書190集

仙台市教育委員会　1986　『上野遺跡』　仙台市文化財調査報告書88集

仙台市教育委員会　1989　『上野遺跡』　仙台市文化財調査報告書127集

仙台市教育委員会　1993　「川添東遺跡」「年報14」　仙台市文化財調査報告書176集

仙台市教育委員会　1989　『北前遺跡』　仙台市文化財調査報告書36集

仙台市教育委員会　1983　『茂庭』　仙台市文化財調査報告書45集

仙台市教育委員会　1992　『沼遺跡』　仙台市文化財調査報告書166集

仙台市教育委員会　1987　『山田上ノ台遺跡』　仙台市文化財調査報告書100集

仙台市教育委員会　1985　『仙台市高速鉄道関係遺跡調査概報Ⅳ』　仙台市文化財調査報告書82集

仙台市教育委員会　1990　『赤生津遺跡』　仙台市文化財調査報告書139集

仙台市教育委員会　1988　『谷津Ａ・Ｂ遺跡　芦見遺跡』　仙台市文化財調査報告書120集

仙台市教育委員会　1992　『郡山遺跡　第65次発掘調査報告書』　仙台市文化財調査報告書156集

仙台市史編さん委員会　1995　『仙台市史　特別編２　考古資料』

仙台市史編さん委員会　1999　『仙台市史　通史編１　原始』

東北大学埋蔵文化財調査委員会　1986　『東北大学埋蔵文化財調査年報』2

東北大学埋蔵文化財調査研究センター　1999　『東北大学埋蔵文化財調査年報』11

東北大学埋蔵文化財調査研究センター　1999　『東北大学埋蔵文化財調査年報』12

東北大学埋蔵文化財調査研究センター　2000　『東北大学埋蔵文化財調査年報』13

東北大学埋蔵文化財調査研究センター　2001　『東北大学埋蔵文化財調査年報』14

中村五郎　1983　「東北地方南部の縄紋早期後半の土器編年試論」『福島考古』24号　pp.131～140　福島考古学会

中村五郎　1986　「東北地方の古式縄紋土器の編年」『福島の研究』第１巻地質考古編　pp.116～142

丹羽茂　1982　「大木式土器」『縄文文化の研究』4　pp.43～60

馬目順一編　1982　『竹ノ内遺跡』岩紀氏埋蔵文化財調査報告第８冊　いわき市教育委員会

真山悟ほか　1987　「小梁川遺跡」『七ヶ宿ダム関連遺跡発掘調査報告書Ⅲ』宮城県文化財調査報告書第122集

宮城県教育委員会　1986　『観音堂遺跡　新宮前遺跡』　宮城県文化財調査報告書第118集

REPORT
OF THE ARCHAEOLOGICAL RESEARCH ON THE CAMPUS OF TOHOKU UNIVERSITY

Vol.15 March 2001

The Archaeological Research Center
on the Campus, Tohoku University
Katahiracho, Aoba Ward, Sendai 980-8577 JAPAN

Summary

Introduction

On the campus of Tohoku University, a lot of archaeological sites are known. Among them, Sendai Castle is the most famous and largest one. Almost all of the south part of Kawauchi campus is located on its secondary citadel area. Aobayama campus includes remarkable Paleolithic sites and Initial Jomon sites.

In Japan, if existing circumstances need to be changed in the known site area, excavation research on the buried cultural properties must be carried out. The Center mainly carries out salvage excavations of archaeological sites on the campus.

This is a report of two sites (i.e., NM16, AOE6) excavated by the Archaeological Research Center on the Campus in 1996.

NM16 site (Loc. 16 of Ninomaru, i.e., the secondary citadel of Sendai Castle)

The main citadel of Sendai Castle was built in A.D.1600 by Masamune DATE. In A.D.1638 his son, Tadamune DATE built the secondary citadel on a lower terrace. *Ninomaru* had practically been the center of the government of Sendai-*han* for some 250 years until Meiji Restoration.

NM16 area corresponds to the area of southwest corner of Ninomaru. There were main buildings such as *Gozanoma*, *Goshinjo* at this area. Gozanoma was both a sitting room for the *daimyo* and space for annual events. *Goshinjo* was one of the bedrooms for the *daimyo*. NM16 was excavated prior to construction of a temporary lecture house of the Faculty of Economics. Traces of leveling of ground with disused roof tiles and pebbles was found at 50cm the land surface. This leveling of ground is considered to occur in the late 18th century - the first half of the 19th century.

AOE6 site (the sixth excavation of Aobayama site Loc.E)

AOE6 site is located on Aobayama campus of Tohoku University. The area close to AOE3 and AOE4 was excavated prior to construction of a research building of the Department of Physics on Aobayama campus.

All features were found on layer 3. A lot of cracks and gaps derived from landslides were found on the sections and on layer 3 at the south to the southwest corner of the area. These are observed from the layer 2b to the layer 12. The landslide traces were also found at AOE2. From their stratigraphic positions, it is inferred that the landslide occured as a series. These are not connected with the neotectonics. It took place locally come with sliding of lumps of soil. These cracks run to layer 2b, and they are covered by layer 1 and 2a. Because of this, it is inferred that these were formed after the deposition of layer 2b. The same sort of

cracks were also found at AOE1. It is not a direct series to AOE6, but it seems that these cracks were formed almost comtemporary.

In the present excavation, 3 earthen pits and 14 pits were found. The earthen pits of No.1 and No.2 were trap pits of Jomon period. The plan of No.1 is a rectangle, and a pit was found at the base. Eastern half of No.2 was broken, but it is assumed to be rectangular.

Most pottery sherds are classified as the Aobayama E type Jomon pottery, with incised lines made by shell-edge. These belong to the late stage of the Initial Jomon. Because these pottery has been found at AOE3 and AOE4, this area is a range of continuous settlement to those found at AOE3 and AOE4.

Other types of pottery belong to the middle stage of the Initial Jomon, the final stage of the Initial Jomon, the middle stage of the Middle Jomon, the late stage of the Middle Jomon, and the Final Jomon. It is evident that this area has been used for a long time during Jomon period.

写　真　図　版

図版１～２：仙台城二の丸跡第16地点
図版３～９：青葉山遺跡Ｅ地点第６次調査

1．3層上面調査区全景（東から）

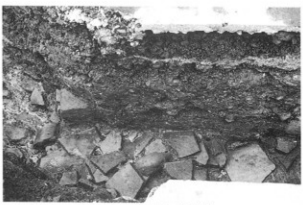
2．3層上面の瓦（南から）

3．調査区東端3層および4層上面の瓦（東から）

4．4層上面調査区全景（東から）

5．4層上面の瓦（東から）

図版1　仙台城二の丸跡第16地点の調査（1）
Pl. 1 View of NM16 (1)



1．4層上面の瓦（南から）

2．調査区中央東寄り北壁（南から）

3．最終状況（東から）

T 1

T 2

T 3

T 4

T 5

T 6

図版２　仙台城二の丸跡第16地点の調査 (2)・出土瓦
Pl. 2 View of NM16 ② and features of NM16, Roof tiles from NM16

1．調査区全景（東から）

2．2層終了全景（東から）

3．調査区北半3層上面全景（西から）

4．調査区北半3層上面全景（東から）

5．調査終了状況（南東から）

6．1号土坑セクション（北から）

7．1号土坑完掘状況（北西から）

図版3　青葉山遺跡E地点第6次調査区全景・検出遺構
Pl.3 Views and features of AOE6

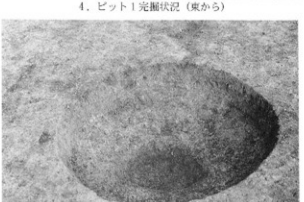
1．2号土坑セクション（北から）

2．2号土坑完掘（東から）

3．3号土坑セクション（北から）

4．ピット1完掘状況（東から）

5．ピット2完掘状況（北西から）

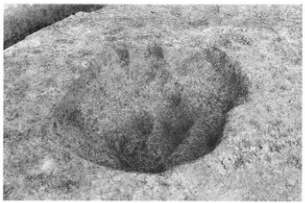


6．ピット3完掘状況（北西から）

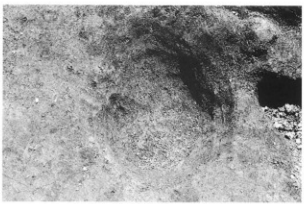
7．ピット4完掘状況（北東から）

8．ピット5完掘状況（南西から）

図版4　青葉山遺跡E地点第6次調査区検出遺構（1）
Pl.4 Features of AOE6 (1)

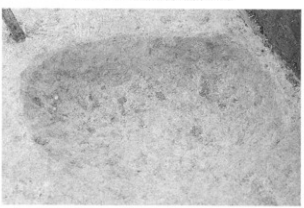


1．ピット6完掘状況（西から）



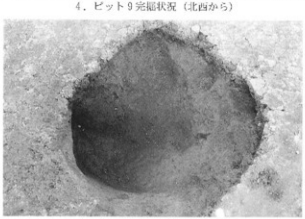
2．ピット7完掘状況（南東から）

3．ピット8完掘状況（南西から）

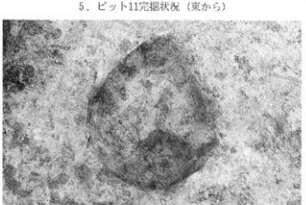


4．ピット9完掘状況（北西から）

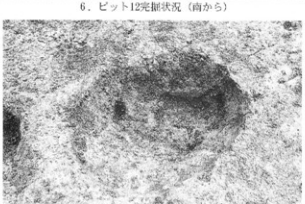
5．ピット11完掘状況（東から）



6．ピット12完掘状況（南から）



7．ピット13完掘状況（南から）



8．ピット14完掘状況（西から）

図版5　青葉山遺跡E地点第6次調査区検出遺構（2）
Pl.5 Features of AOE6 (2)

1．BM・BN－16～19区２層遺物出土状況（南から）

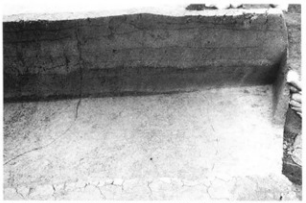
2．H－15区２層石器集中出土状況（東から）

3．AS・AQ－21～23区２層遺物出土状況（南から）

4．BI～BK－17～19区地すべり痕検出状況（東から）

5．BG・BH－18・19区深掘り調査区地すべり痕検出状況（東から）

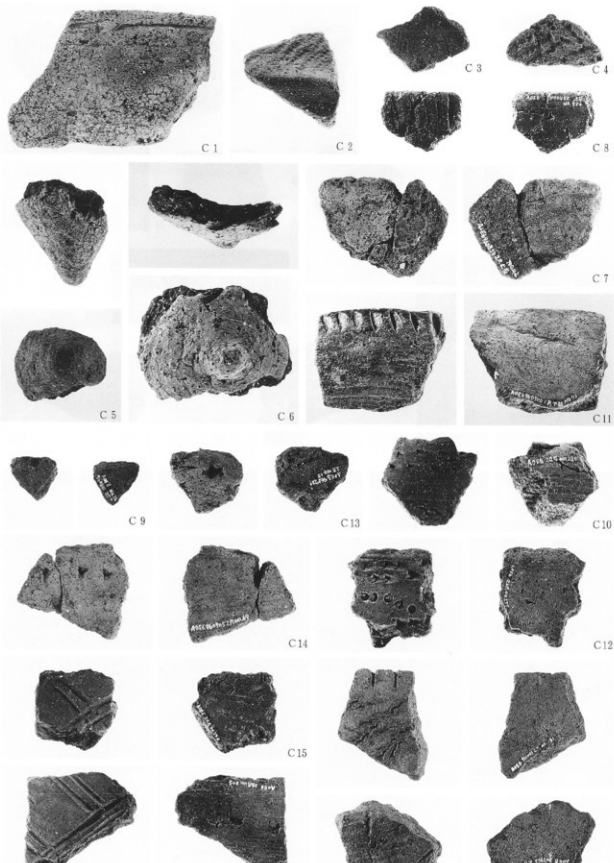
6．BN－15～19区深掘り調査区地すべり痕検出状況（南東から）



7．BK・BL－18・19区深掘り調査区地すべり痕検出状況（西から）

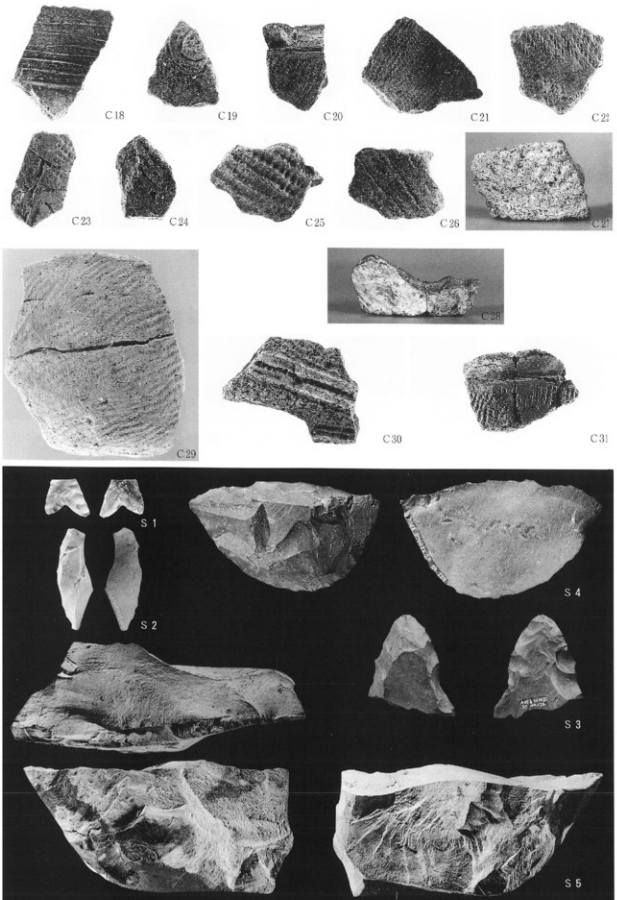
8．BS－14・15区深掘り調査区地すべり痕検出状況（南から）

図版６　青葉山遺跡Ｅ地点第６次調査遺物出土状況・地すべり検出状況
Pl.6 Landslide, pottery and stone implements from AOE6

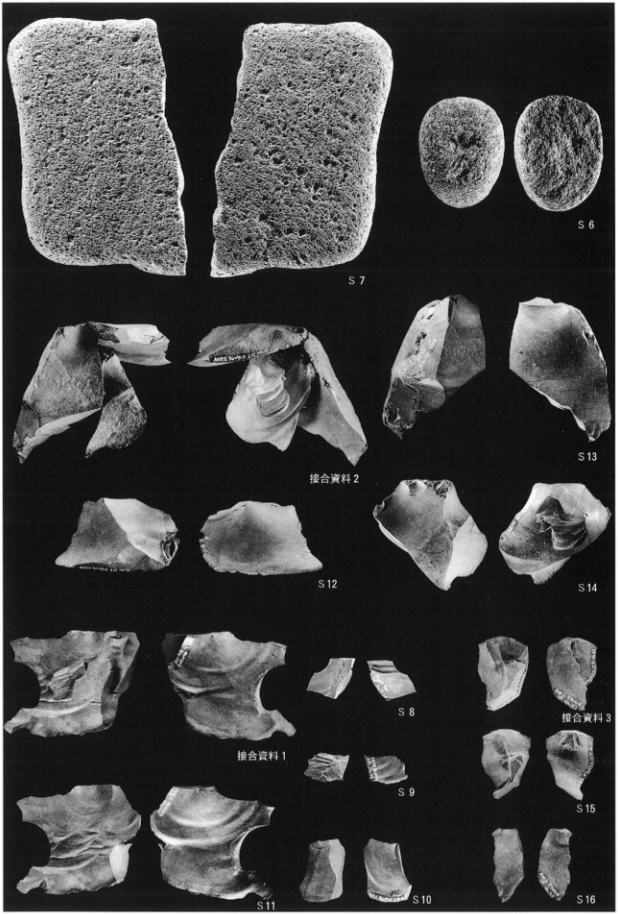


図版 7　青葉山遺跡 E 地点第 6 次調査出土遺物 (1)
PL. 7　Pottery and stone implements from AOE6 (1)

S＝2：3



図版 8　青葉山遺跡 E 地点第 6 次調査出土遺物 (2)　　S＝2：3
PL8　Pottery and stone implements from AOE6 (2)



図版 9　青葉山遺跡 E 地点第 6 次調査出土遺物 (3)
Pl. 9　Pottery and stone implements from AOE6 (3)

S 6、S 7 は S＝1：9
その他は S＝2：3

報告書抄録

ふりがな	とうほくだいがくまいぞうぶんかざいちょうさねんぽう
書名	東北大学埋蔵文化財調査年報
副書名	
巻次	15
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	須藤　隆・藤沢　敦・関根達人・京野恵子・　　・大月義徳・関　教司
編集機関	東北大学埋蔵文化財調査研究センター
所在地	〒980-8577　宮城県仙台市青葉区片平二丁目1－1　TEL　022-217-4995
発行年月日	西暦2001年 3月30日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
仙台城跡	宮城県 仙台市 青葉区川内	04100	01033	38° 15′ 10″	140° 51′ 20″	1996.7.1～10.11 1997.4.1～7.30	11	経済学部仮演習棟新営
青葉山遺跡 E地点	宮城県 仙台市 青葉区荒巻 字青葉	04100	01443	38° 15′ 17″	140° 50′ 24″	1998.2.9～3.24	1,836	理学部研究実験棟新営

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
仙台城 二の丸跡 第17地点	城館	近世	整地層	瓦	
青葉山遺跡 E地点 第6次調査	集落跡	縄文（早・中・晩期）	陥し穴	縄文土器・石器	

東北大学埋蔵文化財調査年報15

平成13年３月30日

発行　東北大学埋蔵文化財調査研究センター
〒980-8577 仙台市青葉区片平２丁目１－１
東北大学遺伝生態研究センター内
ＴＥＬ　022（217）4995

印刷　株式会社　東　北　プ　リ　ン　ト
ＴＥＬ　022（263）1166